サークル「百華楼の狸」
本文：燻製ねこ
絵：炙りサーモン
凛々しき女軍人を徹底的に
犯し、嬲り、叩きのめす!!!

導師を探す旅に出ていたアリーシャは深い森の中で部下たちとはぐれ、触手状の憑魔に囲まれてしまった。しかし彼女は無数の敵にも関わらず、巧みな棒術でつけ入る隙を与えない。

この彼女は確信する。その程度の敵であれば突破できるーーーーー、と。それは決して騎りや油断ではなかった。どんな武術の達人といえど、これだけの敵を相手にしながら地下から襲ってくるモノの存在を察知することはできないだろう。

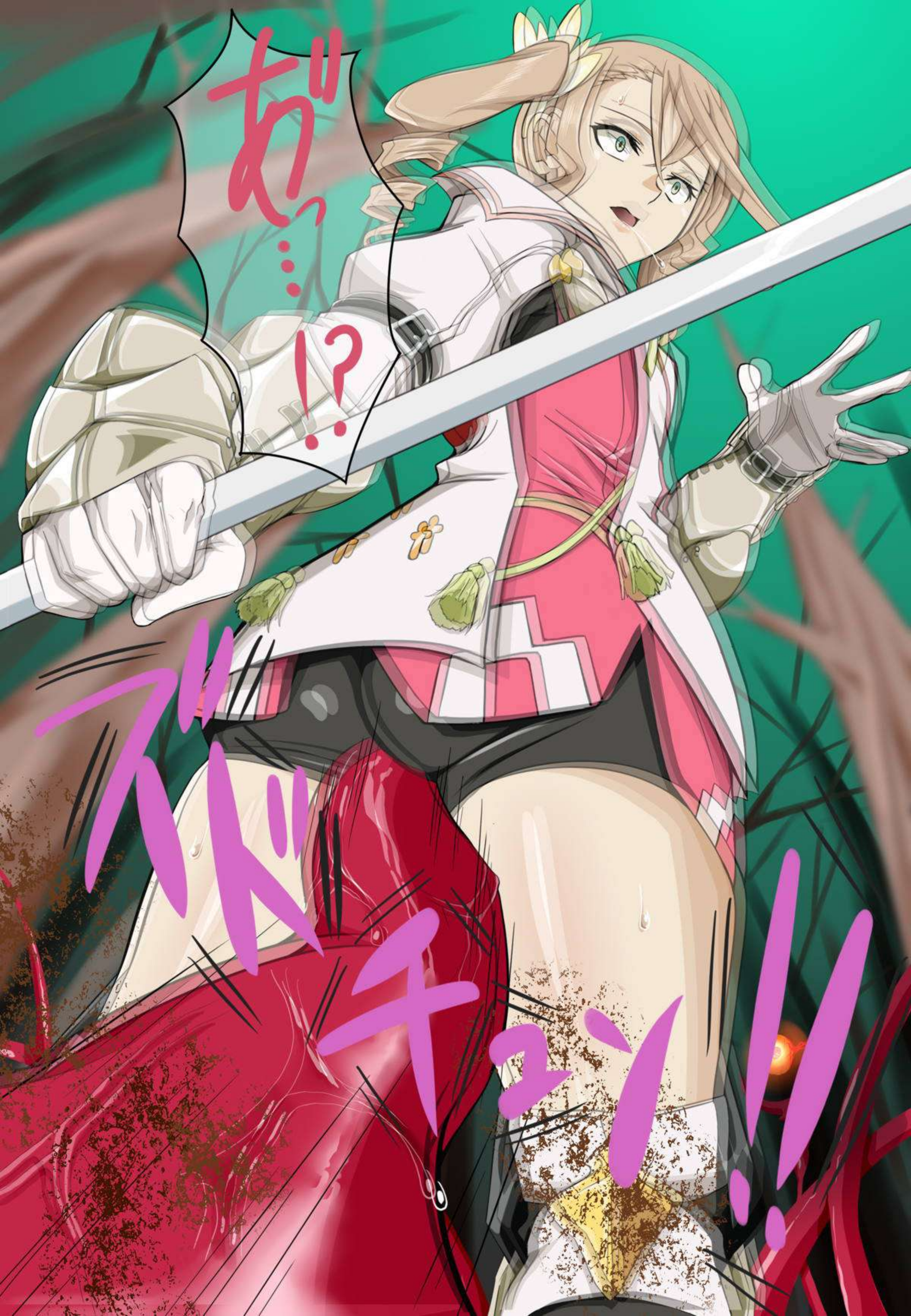
数は多いが戦闘力は大したことない。焦らずに殲滅して、部隊と合流せねば……

ハァ

ハァ

ハァ

ドッ!!


ガ…
!?
ズボチョン!!

お尻にっ……何かが……！

ち、地下から触手だと……!?……っ……焦るな……冷静に対処を……！

あぐっ……んぎぃっ……！

グリュッ

グリュッ

ズズ…

ぎゅっ!?
ガクガク
ズバッ!!

んぐぁ……っ！がっ……!!
ビクビク…
わ、私のアソコに……触手が……！
しかも……槍を落としてしまうなんてっ！
ズチュッ♥
グチュ♥
又ぎゅ♥
ニッチュ♥

んぐお…っ
がっ…ぎっ…!?
しょ…触手がっ…
私の中を遡って…っ!?
ボコォ…
とっ…
止まらない…!
ズボボボ
ニュル
ニュル

そ、そんな…っ
まさかっ…！
ぐぶっ…ゆ
ゴッ
グッ…
ぎりりりり

ズリュ
ウ
ウ
ウ

…っ！
ビュッ♥
カビュッ
ビュッ
ドッ
ビュルルル

それから数時間、憑魔はアリーシャに精を注ぎ続けた。
妊婦のようにお腹が膨らみ、まさに精液袋と呼ぶに相応しい状態になるまで……。
触手貫通、精液大量注入……筆舌に尽くしがたい痛みの中でやがてアリーシャの意識は闇の底へと沈んでいくのだった。

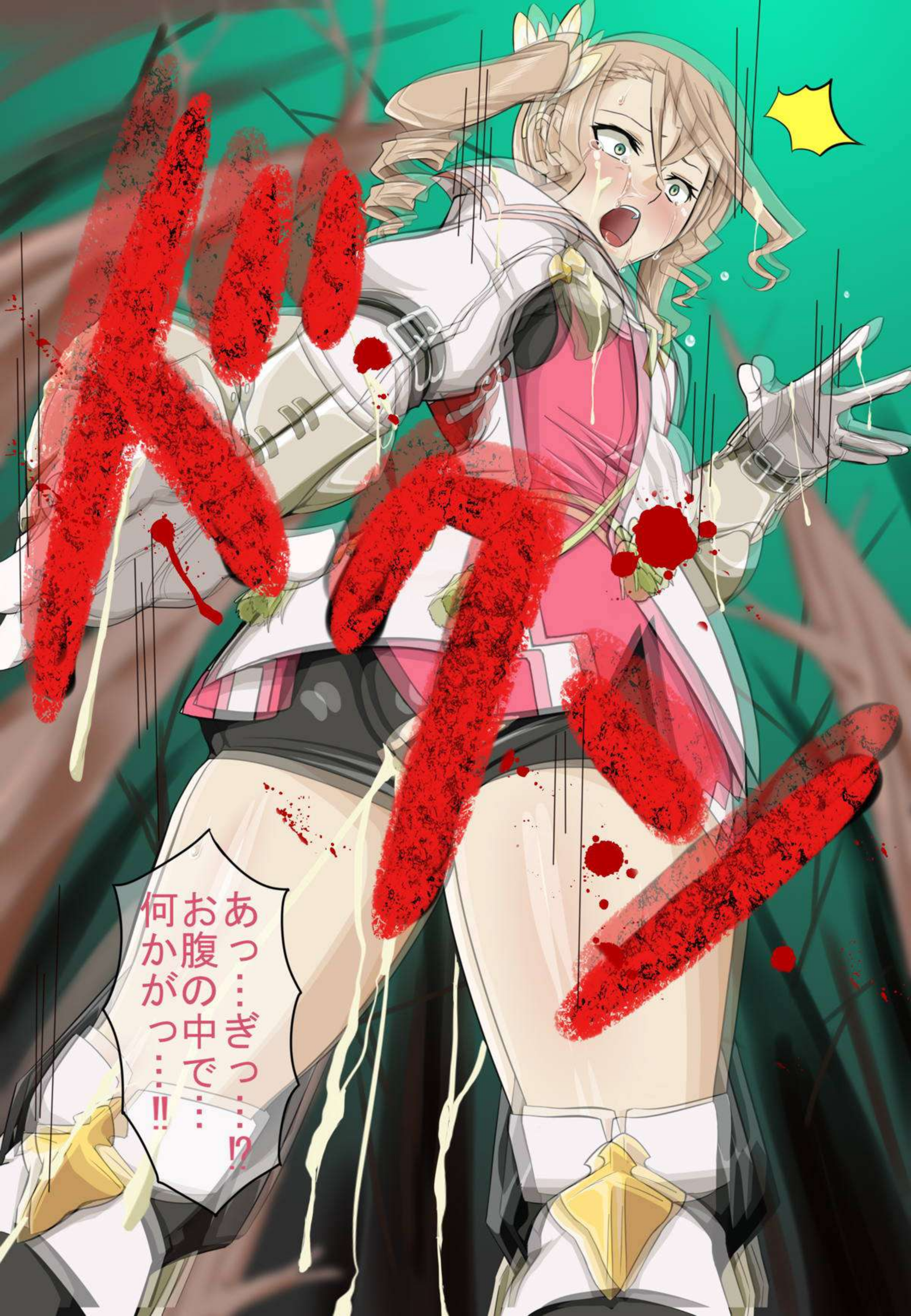
彼女が意識を取り戻した時、既に憑魔の姿は消えていた。
股から大量に零れ落ちる汚れた精液の感触に
心を傷つけられながらも、アリーシャは再び立ち上がる。
全てを導く師を見つけ出し、国を、民を救うため。
気付いたその身体の中で胎動するものの存在に彼女は
いかし、なかった……。

ぐっ……魔物は去ったのか……？
お、お腹が……。
早く精液を掻き出して、
部下と合流せねば……。

ヒクッ
ヒクッ……

ハァ
ハァ
ハァ

ブビッ
ブビッ
ブビッ


何おあっ……ぎっ……!?
お腹の中で……
何かがっ……!!

うっ…ぶっ…！

も…っ…！駄目…だっ！口からっ…!!

ガリッ…

うああっ…！魔物の幼虫がっ…お尻と…膣からも…っ！

ズリュ♥

ヌチュッ…

ぶっ
ビクッ!!
ビクッ!!
ぉ!
ムリュ
ムリュ
ぜぜ…
ぢぢぢ!!

あっ……げ……ひっ……。

か……感じる……私のお腹の中に……無数の魔物が……っ……。

ヒクッ…ヒクッ

グッ

も……もう駄目だ……立っていられ……ない……。

お……おお……。

ムリ…ムリ…

キチキチ…

ガバル…

その後もアリーシャは口、膣、肛門から憑魔の幼体を出産し続けた。出産が終わって脱力していれば再び触手状の憑魔によって卵と精液を注ぎ込まれる。深い森の奥に、気高き姫騎士の屈辱と絶望に塗れた美しく無様な悲鳴が延々と吸い込まれていくのであった…。

アリーシャはその後、失意のまま国に戻った、あるいは憑魔の母体として森の中で永遠の刻を生きたとも言われる。が、どちらであっても大した問題ではない。いずれにせよ、この世界はアリーシャとスレイが出会わなかった時点で、災禍の顕主により滅亡することが確定しているのだから。

ザウデ不落宮の解放に成功したアレクセイは用済みになったエステルを民衆の公衆便器として晒し者にした。
多くの民は心優しい姫のあまりの処遇に眉を顰めたが、帝都のならず者達は本来手の届かない皇族の、しかも美しい姫を合法的に犯せるということに歓喜こそすれ、罪悪感を抱くはずもなかったのである…。

汚れなき無垢な姫に
今飢えた獣の如き男たちの汚れた欲望が
ぶつけられようとしていた…。

いやぁっ！止めて下さいっ……！ああっ!!
ズチュン♥
わりいな、姫さん初めてがこんなカスみたいな男でよ～。
ううっ……こんな……あんまりです……っ！
オイ、無駄口叩く暇あるならロもつかってくれや。
えっ？

チッ、使えねぇな。こうすんだよ！

ヒャハハハハ!!箱入りの姫様にゃ少々刺激が強すぎじゃねえか？

ズキュン♥ズキュン♥

んごぉっ!?

ズキュン♥

い、いやっこんな嘘…です。口に排泄器を入れるなんて…。

ボォォ!!

ぶぷっ…おごぉ…！

ううっ…酸っぱい味のする塊と先っぽから変な汁が…っ。吐きそう…です…。
おら、喉まで使ってやるぞ…っ！
パン
パン
パン
うむうっっ、んごっ、んっぐおおおっ！
んぶじゅるっ…ごおっ…げお…っ!!
ドチュ
ズチュ
ブボッ
おっいいねぇ。お前が喉突く度にただでさえ名器のアソコがよく締まるぜ。

うおっ…もうイクっ…！
ブピッ♥ビュルルル…
そん…なっ…わたしの膣に男の人の精液が…。
んぶうううっ!?
ビクンビクン
おぐっ…ゴボッ！んごお…お…！
よしっ、こっちもだ…！
ブピッ
ブビュル♥ドビュルル♥
く、口にも…っ、量が多すぎます…！

ふぃ～～出した出した…気持ちよかったぜ、お姫様。
う…ああ…げほっこんな…膣に出すなんて…。
妊娠してしまったら…。
「たら」？何言ってんだか。
ハァ
ハァ
ドクッ
ビクッ
ビクッ

ドチュン♥
あ…あ…ユーリ…ユーリ…！わたし…っ！
お前は毎日犯されるんだから遅かれ早かれ妊娠するんだよ！と言うことで宜しく～。
あううっ！

うあっ……んおおっ……がぁっ……。
そろそろ一週間か……もう経験人数4桁いったか？
あひっ……おおっ……
つーか、最近は同情してた町の奴らも普通に使ってるからな～。流石に憐れだぜ。ヒヒッ。
……ユー……
ヒクッ
ヒクッ
ドロォ…

一周年オメデト～
久しぶりに会いに来て
やったぜ？

意外と長髪も
似合うじゃねえか。
しかし臭えな、
殆ど風呂も入って
ねえしな～。

んあ…あ…。

ズロオ…

……う…あ…。

もう帝都でやってない
男いないんじゃないか？
憐れだねぇ…
心優しいお姫様が…。

エステルがユーリ達により救出されたのは
それから二月後のことであった…。
あまりに変わり果てた彼女の姿に
仲間たちは絶句し涙した。

その後エステルは歴史の表舞台から
姿を消す。
一説には、この十数年後にアレクセイを
打倒し、帝政を復活させた新しい皇帝が、
過酷な凌辱刑で身籠ったエステルの子供だ
とも言われているが、事実は定かではない。

クロエは街の人々に依頼され、モンスター討伐のために遺跡を捜索していた。彼女の力量であれば本来苦も無くこなせる依頼。

だが、今のクロエはセネルの事で思い悩む一人の少女でもある。そのことが、彼女に本来ならあり得ない一瞬の隙を生じさせたのだ。衝撃で気を失った彼女が目を覚ますと大型のモンスターに無理やり股を開かされていた。

クロエは気丈に振舞いながらも、これから始まる地獄を予感し戦慄した。

キッ!

あぐっ、私をどうするつもりだ…!?

く、このっ、離せ…!

ぐいぐい

ガキッ!!

ビクッ

ひっ……!?
な、何だそれはっ……!
うっ……くっ臭いっ……。

まさか……そんなの
無理だ……よ、よせ……!

ハァ…

ブッ
ぶぐゔぅ…!?

づっ…ぎっ、があっ…！

ギリ…

ドンッ！

ダッ！

あぐぅおおおおっ、おおおっ!!

ズ…

ダッ！

あっ……？
がっ……げっ……!!

ガッ!!

ガガガ

ひっ…ぎいいっ、いいいいいっ!!

ガクガク…

壊れるっ…二匹の巨根に突かれて、私のお腹は滅茶苦茶になって…!

ズブッ!ガリッ!

クーリッジ…ッ!

私私は…はっ…!

ゴリュウ!

うごっ!?
……っ……っ……！

ビクー！

うああっ!?
お尻から入った
精液がっ……
遡って……!?

ブチィ

ボフォ

ドビュビュビュ

ブビュ♥

ぶげっ…

ズーン

ガガガ

ミキミキッ

おげげえぇぇぇ

えぇぇぇ

まだ何匹もいる…匂いに釣られたのか…。

ヒク…ヒクン…

あげつ…が…。

シャーリィ…クーリッジと幸せに…。私は暗い森の中で一人惨めに…。

ドロォ…♥

んおっ…げひ…。

それから三日間クロエはモンスター達の性欲のはけ口となった。
およそ普通の人間であれば生き残る可能性は万に一つもない。
彼女が生還したのはひとえに彼女自身の鍛え抜かれた肉体のおかげだった。
……だが一度壊れた精神はそう簡単に戻らない。

セネルを始めとした仲間たちの甲斐甲斐しい看護にも関わらず
クロエがかつての表情を取り戻すまで二年近い期間を要した。
そこまで彼女の精神を追い詰めたものは、モンスターによる破壊的な責めではない。
自分の死後、自分のことをやがて忘れ、平和な家庭を築くセネルとシャーリィの姿。
輪姦されている間中、この幻想が彼女の心を苛んだのである。

ルーティが目を覚ますと、そこは薄汚い公衆トイレの一室であった。頭を殴られ気絶させられたのか、後頭部がズキズキと痛む。スタン達仲間と別れて一人で買い物に出た隙に襲われたのであった。

やがて、トイレの中に下卑た笑みを浮かべた男達が数人入ってくる。ルーティは彼らに見覚えがあった。強盗や脅迫を繰り返していた小悪党：ルーティは彼らにウソの儲け話を持ち掛け罠にはめ、役人に突き出して懸賞金をせしめたのである。

これから起きることを予期し、心拍数が上昇する。その怯えを表情には出さず、強気な態度で男達に臨むのであった。しかし、

ちょっと、アンタ達！こんなことをしてどうなるか分かってんでしょうね!?

それはこっちの台詞だ。てめぇの金稼ぎのために俺らを役人に売り飛ばしやがって……。

100G♥

ギッ！

まぁまぁ二人とも落ち着けって
おまえが金稼ぎしているのは孤児院設立のためなんだって？
良い話じゃねえか。俺らも協力してやるよ。

……っ！このっ……！
思った以上に下種みたいね……！

へへっ！危ない橋渡るよりそのエロい身体で稼いだ方が確実だろ！むしろ感謝して欲しいぜ。

100G♥

じゃあ、俺が一番乗りだな…っと!!

うぐうううっ…！

ドオォッ!!

おおっ？この感触…てめぇ処女かよ!?

ヒャハハハハッ!!
こいつぁイイ!
この守銭奴女が
性に関しては初心な
乙女だったとはよ~。

100G♥

あぁぁぁぁぁぁっ!!

ズッ♥
ズチュ♥
ドッ♥

あの馬鹿…っ!
こんな時に
何してんのよっ…!

うおおっ！出る…ぜっ!!
ひっ…いやぁっ!!
ビクッ！
ビュルルビュブブ
初セックスが強姦で膣出しまでされちまうとは可哀そうになぁ。
折角だから感想聞かせろよ。

100G♥
…気が済んだなら金置いてさっさと出て行きなさいよっ…！
こっちはアンタ達みたいにヒマじゃないんだから無駄口叩いてないでさっさと終わらせて…！
どうやらこいつ、まだ自分の立場が分かってねーようだな。
ブルッ
ブルッ
ブルッ
ゴポ…

そんなに金が欲しいならくれてやるよ、てめぇの一番大事なところにな。
え…？
100G♥
ゲシッ
メキィ…

100G♥

おらあああああっ!!

んぎっ!?

ガフッ!!

ギャあぁあぁあぁ!!

ドッ!!

十人分先払いだ、有難く受け取りなぁ!!

あっ…がっ…

お、嬉しさのあまり言葉も出ねぇか？

100G

ビクッ♥

ビクッ!!

ブクブク…

ギチ…！

んおっ…げ…ひっ…

ビキィ…！

まだまだこんなもんじゃねぇぞ。どんどん客呼んでやるからな～。

あ……えぁ……。

お～たった三日で結構稼いだじゃねえか。

ピク…

ピクッ

ヒュー

ヒュー

ズピッ！

ドロォ…♥

タプン…

と言っても誰も監視してねえからタダで使つた奴が大半みたいだぜ。

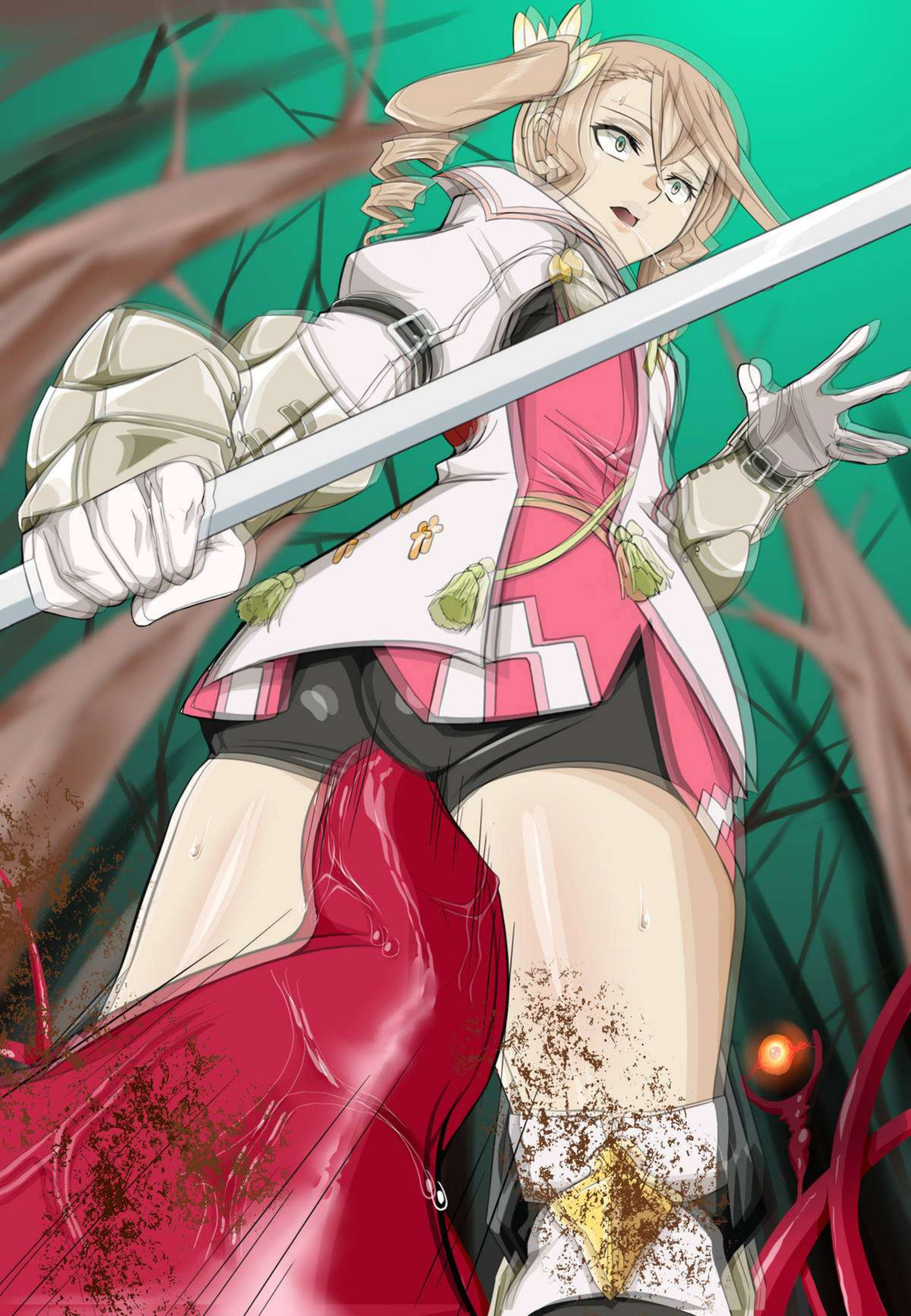
まぁこれでも、孤児院作り実現も夢じゃねえって。

ギャハハハッ！引きこもり続頑張れよ。

が……あ。

その後のルーティの行方については定かではない。肉便器として連日犯され衰弱死したとも言われるし、仲間に救出され、スタンの故郷のリーネ村で療養生活を送り、その心の傷を癒したともいわれる。

ただ一つはっきりしているのは、その頃一人の女性の呼び掛けで、村に孤児院が作られたということだけだ。



100G♥

100G♥

100G♥

100G♥

100G♥

100G♥

100G♥

100G♥

100G♥

序章　標無き世界

惑星オールドラントの歴史は、永らくユリア・ジュエの預言（スコア）に沿って紡がれてきた。来たるべき『未曾有の大繁栄』――それを光明として、時に国同士で争い、時に助かるはずの命を見殺しにしてまで、預言の示す未来に殉じてきた。

だが、その呪縛はもはや存在しない。預言の源であるローレライは、『聖なる焔の光』とその仲間によって解放された。オールドラントに生きるすべての者が、預言に縛られるのではなく、己自身の感情で喜び、悲しみ、悩む自由を得たのだ。

とはいえ、その変化を誰もが自然に受け入れられる訳ではなかった。何しろ預言は、人類が数千年に渡って拠り所としてきた道標なのだ。これまで人々は、どのような苦境に陥ろうとも、それが星の告げる運命なのだと割り切る事ができた。しかし、今やすべてが自己責任だ。

“今自分がしようとしている事に、問題はないのか？”
“この行動がきっかけで、後に思いもかけぬ不幸が降りかかるのではないか？”

ローレライ解放から1年が経ってもなお、多くの人間がこうした不安に駆られている。

そうした人々を助け、導く責務を有するのが『ローレライ教団』だ。本来は預言の遵守を目的とする宗教組織であり、ローレライ無き今となってはその存在意義すら定かではない。しかし、ユリアの預言を伝えるものとして世界を事実上支配してきた組織ゆえに、今なお迷える民の拠り所となっているのが実情だった。

教団に属する者は、各々のやり方で信者のために尽力している。その中でも特に献身的なのが、教団の音律士（クルーナー）であるティア・グランツだ。

音律士の歌声は総じて耳に心地良く、押しかける民の不安を和らげる。特にユリアの子孫であるティアがロずさむ歌は、聞いているだけであらゆる苦悩から解放されると評判だった。

教団の本拠地であるダアトの都には、今日もティアの譜歌が響きわたる。木箱や石階段に腰掛けてそれに聞き入る人間の顔は、一様に陶然としていた。彼らとてダアトに乗り込むまでは、不安からの苛立ちを露わにしていたというのに。

しかし、夢見心地になるのも無理はない。伸びやかで澄み切った歌声のみならず、歌い手の容姿もまた類稀なのだから。

右目を覆い隠しつつ、腰に届くほどに伸ばされたセピア色の髪が風に遊ぶ様は、そのまま絵画に出来うるほどの神秘性に満ちている。顔の造りも浮世離れして見えるほどに美しく、極めつけはその身体つきだ。

女の魅力とは何かを示すがごとく、豊かに実った乳房。それが、見る者の視線を釘付けにする。男をただただ見惚れさせ、女には嫉妬あるいは憧憬の念を抱かせる。

そこからかろうじて視線を下に引き剥がしても、その先に待つのはやはり目を見張るようなボ

ディラインだ。豊かな胸とは裏腹に、腹部は顔と変わらぬ細さにまで絞られ、そこから安産型の腰周りへと一気に広がる。肉感的でありながらもすらりとした太腿、一切無駄のないふくらはぎと足首……それらの造形美が脳へ刻み込まれた後に、ようやく石畳が見えてくる。
　その視線の旅を終えた後、多くの人間がこう思うだろう。これぞ、女体美の極北であると。

「……少しは、気晴らしになりましたか？」
　譜歌を歌い終えたティアが、躊躇いがちに眼前の信者達へ問いかける。すると一同は、晴れやかな心を代弁するような万雷の拍手を浴びせかけた。
「おねえちゃん、すごーいっ！！」
「おおっ、すげぇや！　胸のわだかまりが綺麗に消えちまった！」
「あたしもさ、こんなにスッとした気分は久しぶりだ。預言がないのは不安だけど、これならまた頑張れそうだよ！」
　垂れ下がった目尻から涙さえ伝わせ、感謝の言葉を口にする信者達。それを受けてティアは、恥ずかしそうに頬を赤らめ、胸元に手を重ねながら一礼する。

「まーだ人見知りなの直ってないんだね。ティア・グランツ“奏手”様？」
　民衆の波が引いたまさに直後、後方から溌剌とした声が掛けられた。
「っ！」
　ティアは目を見開きながら振り返る。視界に映りこむのは、小悪魔的な笑みを浮かべる少女だ。教団のシンボルがデザインされたマントに、ピンクの服、腿までのハイソックス。それらの装いが、少女の魅力にさらなる華を添えている。
　彼女の名はアニス・タトリン。ティアのかつての旅仲間であり、教団最高指導者である『導師イオン』の守護役でもある。もっとも、アニスの背後で無邪気に手を振る現導師・フローリアンはイオンの複写人間（レプリカ）であり、まだまだ導師役をこなせる器ではない。それゆえ表向きには最高指導者とその護衛という図式だが、裏では前導師の遺志を継ぐアニスこそが教団再建の舵を取っている。同じくかつての旅仲間にして、稀代の毒舌家でもあるジェイドに言わせれば、『まさに人形士（パペッター）の本領発揮』というところだ。
「もうっ、からかわないで！」
　ティアは頬を染めながらアニスを睨む。そして、その視線をふと横に逸らした。
「それに、私がもう“奏手”だなんて……今更だけど、いいのかしら」
　奏手。それは教団が独自に有する軍事力、信託の盾（オラクル）騎士団における階位の一つだ。全8階位中の5位ではあるが、僅か1年前までは最下位の“響長”であったティアからすれば、季節が一巡りする間に3階級も昇進した事になる。しかしその異例を、アニスも、フローリアンも笑顔で肯定する。
「あったり前でしょー。何せティアは、世界崩壊の危機を救った英雄なんだよ？
　それに恥ずかしい話だけど、今の教団で皆の不満を抑えるには、ティアの譜歌に頼るしかないし……」
　アニスは言葉途中から、申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

事実、ローレライ教団は未だ混迷の渦中にある。教団そのものの存在意義が揺らいでいる上、人材も乏しい。最高指導者であるイオンは水面下で入れ替わり、かつて教団の2大勢力であった“元帥”モースと“主席総長”ヴァン、挙句はそれらに従う教団幹部さえ多くがこの世を去っている。現在は生存者の中で最も階級の高い女将カンタビレが軍を率いているが、派閥争いにも加わらず我道を歩んできた将ゆえに、軍内の統率には苦戦しているようだ。そのような状況下で信者に安心を与えるとなれば、もはや歌や音楽のような漠としたものに頼らざるを得ない。

「そうね……私まで不安がってちゃ、駄目よね」

今一度、自らの立場の重要性を認識したティアは、眼前の少年少女に薄く微笑みかける。するとアニスも、つられたように表情を変えた。

「そーそー、元気が一番っ！　……っと、そろそろ行かなきゃ。じゃー、またねティア！！」

アニスは弾けるような笑顔のまま、フローリアンの手を引いて走り出す。

「あっ、まってアニス！　ティア。また今度、ゆっくり歌聞かせてね！」

フローリアンも、同じく和やかな笑みで後を追う。

2つの小さな背に手を振りながら、ティアはふと空を見上げた。

「……奏手、か」

先日任命を受けたばかりの肩書きを、改めて呟く。異例の早さでの昇進に、実感が乏しいという事もある。しかしそれ以上に、“奏手”という響きそのものが特別だった。何といっても、彼女の恩師であるリグレットが任じられていた階位なのだから。

ティアはリグレットから、軍人としての全てを教わった。単なる知識や戦闘技術だけではない。師の凛とした立ち居振る舞いそのものが、ティアの目標であり理想だ。ローレライ解放を巡る闘いで敵対し、その死を見届けた今もなお、それは変わらない。

「……リグレット教官。私は、軍人として……正しい道を歩めているのでしょうか？」

虚空へ向けてそう呟く。耳を澄ましても、答えが返ってくる事はない。やがてティアは、小さく頭を振りながら目を見開いた。

――しっかりしなさい、ティア。誰かからの評価を期待するなんて、預言に縋るのと同じよ。

そう自分に言い聞かせ、確たる足取りで石畳を歩みだす。かつての師の位に並び、その先を行かねばならない事への心細さはある。しかしそれを克服しない限り、押し寄せる信者に道を示すことはできない。彼らもまた、預言という標をなくして怯えているのだから。

教団はティアの働きを評価して階位を上げ、ティアは与えられた役目に恥じぬよう決意を改める。

組織とそこに仕える者の関係としては、まさに理想的だ。しかし、教団の中にはその理想的な関係を面白く思わない人間も存在する。

ダアトの第一自治区へ差し掛かろうというところで、いくつかの足音がティアを取り囲んだ。

石畳を削るような固い音は、軍靴の特徴だ。ティアの目つきが鋭さを増す。
「あーらティア、ごきげんよう。そんなに胸を張って、勇ましいこと」
声の主は、害意を隠そうともせずにそう語りかけた。ティアにとっては見覚えのある顔ぶれだ。いずれもリグレットを信奉していた女生徒達。よく憶えている。忘れられるはずもない。士官学校時代、陰湿な嫌がらせを繰り返された相手なのだから。
「“奏手”になった記念に、リグレット教官の真似かしら？」
「呆れた。自分で殺しておいて、よくもまぁそんな事ができるものね」
女達が発したその言葉で、ティアは相手の思惑におおよその見当がついた。彼女らは、敬愛するリグレットをティアが殺したものと思っている。そこで憎悪を募らせていたところ、ついにその当事者がかつてのリグレットと同じ階位にまで上り詰めてしまい、我慢の限界を迎えたのだろう。
確かにリグレットが死を迎えたのは、ティア達との戦闘が原因だ。しかしその戦いは、人類の行く末を賭けた信念のぶつかり合いだった。どちらが正義なのでも、どちらが悪なのでもない。リグレットは己の理想に、愛に殉じたのだ。
しかしリグレットを妄信する女達は、そのような事情など知る由もない。否、たとえ知ったとしても止まらないだろう。彼女達を突き動かしているのは、偏にティアへの嫉妬心なのだから。
「……別に、教官の真似をしているつもりはないわ」
ティアは冷ややかに答えた。こうした棘のある態度が周囲の反感を買うのだ、ということは理解している。だがそれでも、気に入らない相手に愛想笑いをする気にはなれない。彼女が無意識に模範とするリグレットもまた、けしてそのような事はしなかったであろうから。

「ふーん、そう。まあいいわ。ところで、貴女が“奏手”になったお祝いをしたいんだけど」
その言葉に、ティアの眉が吊り上がる。
「そうそう。何しろアタシら同期の中の出世頭なんだからさ。祝わせてよ」
祝う。口ではそう言っているにもかかわらず、女達の目には残忍な光しか宿っていない。ティアをどこかに連行し、昔のように陰湿に嬲ろうという魂胆が丸見えだ。
しかしそう解っていても、ティアに拒絶の自由はなかった。仮にこの場で無視すれば、次は手段を選ばずティアの意識を向けさせようとしてくるだろう。特に首謀者であるゾーイは貴族の生まれであり、庶民を虐げる事を何とも思わない類の人間だ。怒りに我を忘れれば、ダアトを訪れる善良な信者にさえ牙を剥く可能性が高い。
そんな事をさせる訳にはいかなかった。ローレライが解放されたあの日、ティアは誓ったのだ。愛しい人――ルークが存在を賭けてまで守ったこの世界で、皆を幸せにしていくと。
たとえ信者の一人とて、この女達の毒牙に晒すわけにはいかない。自分が耐えることで誰かの不幸が避けられるなら、迷うまでもない。
「……わかったわ」
愛杖を握りしめつつ答える“奏手”を、無数の歪んだ笑みが取り囲む。

そしてこの日を境に、ダアトからは女神の歌声が失われることになった―――。

第一章　望まぬ姦通

ダアトから2時間ほど馬車を走らせた先にある教会……ティアはそこに連れ込まれた。教団全盛の時代に建てられたらしく、広さは相当にある。しかし、そこも今や廃墟と化しつつあるようだ。

「ねぇ、知ってる？　この教会はねぇ、リグレット様の生まれ故郷に一番近いの」

集会室の扉に手をかけながら、ゾーイがティアに囁きかける。ティアの瞳が即座に反応を示した。リグレットから個人指導を受けていた頃、彼女の過去を聞かされた事がある。両親を早くに亡くした彼女は、長い間弟と2人きりで暮らしていた。故郷はダアトのような大都市とは程遠い、閑静な片田舎であったと。

「ここも一年前までは、それなりに信者で賑わってたのよ。でも連中、預言がなくなった途端に錯乱して乗り込んできて、挙句がこの有様」

その言葉と共に、集会室の扉が開け放たれる。かなりの人数を収容できる一室は、無残に荒れ果てていた。ひび割れた窓。真上からの衝撃で叩き壊された木机。床に倒れた無数の椅子。壁には何かが擦れたような赤い染みさえ残っており、ここで起きた惨劇を生々しく物語っている。

「……っ！」

今や世界を覆う恐慌の一端を目の当たりにし、ティアの表情が強張る。

「どうして、こんな事になったのかしら？」

ゾーイが、追い討ちをかけるようにティアの顔を覗きこんだ。一瞬、ティアの表情がさらに引き攣る。しかし次の瞬間には、すべてを背負う覚悟を目尻に宿らせていた。

「まさか、私のせいだとでもいうの？　ローレライを解放しないと、世界中がアクゼリュスのように崩落するところだったのよ」

アクゼリュス崩落――それは多くの人間にとって、忘れえぬ悲劇だ。その悲劇を引き起こした当事者は、『聖なる焔の光』ルークとその仲間。だからこそ、二度とその悲劇を繰り返さないために、ティア達は死に物狂いで運命に抗ったのだ。そこに後悔などありはしない。

「うふふっ、まさか！　貴女は世界を救った大英雄、私たち同期生の誇りよ」

ゾーイの取り巻きの一人であるイヴリーが、白々しい口調で告げた。

「ええ。それに今だって、ダアトに押し寄せる信者のために、色々と慈善行為をしてるみたいじゃない？　アンタって街にいるとすぐに解るのよ。なんていっても、目立つからね」

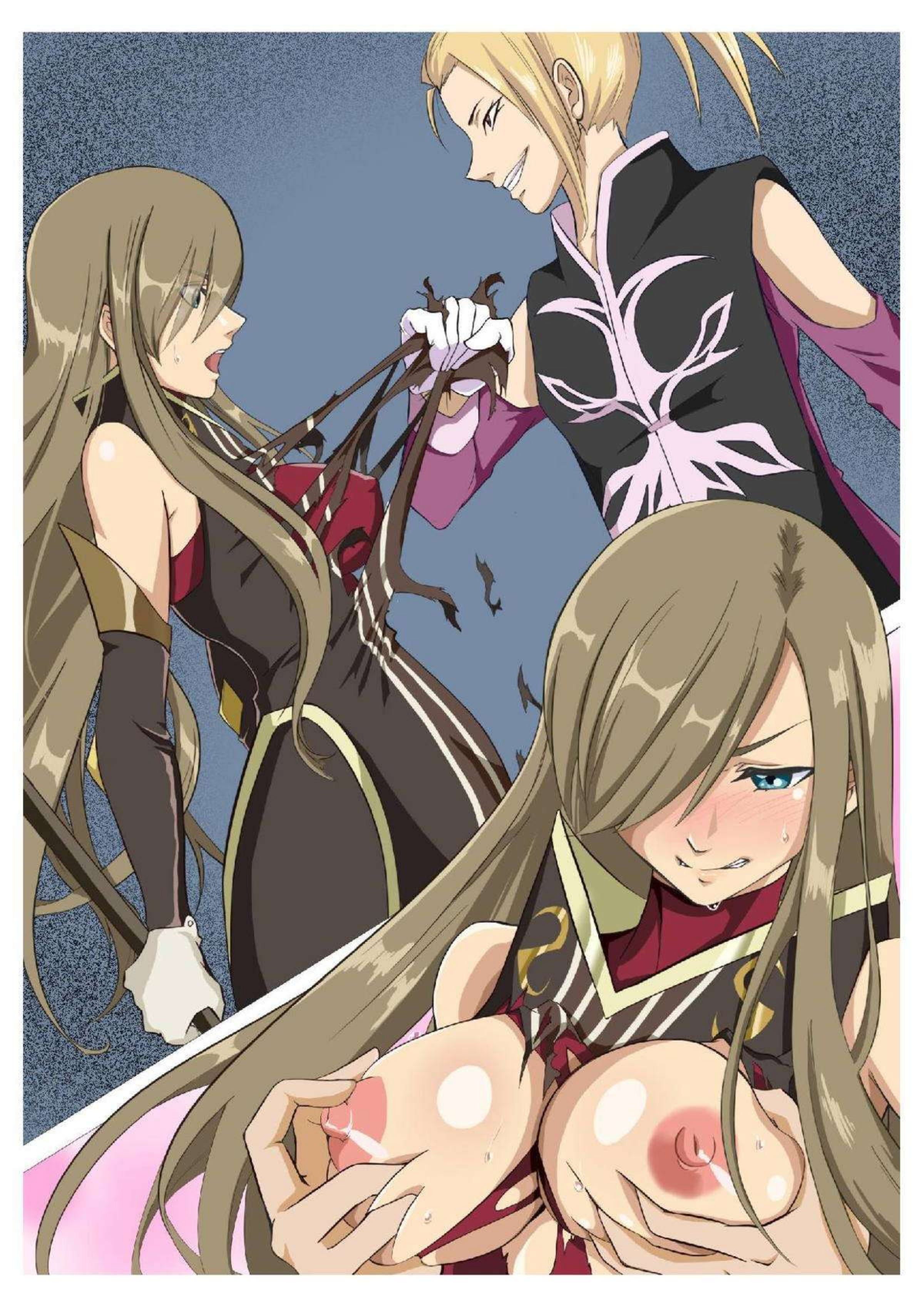
同じくゾーイに付き従っているエヴァが、背後からティアの乳房を撫でた。ティアの身体がぞくりと反応する。

「触らないで！」

ティアは身を捩って逃れようとするが、エヴァは乳房から指を離さない。さらには横に立つイヴリーもティアの左手を掴んで抵抗を封じてくる。右手には杖を握っているため、そうなっては両手の自由がない。

「くっ……！」
　もはやティアにできるのは、青みがかった宝石のような瞳で、3 人の悪魔へ冷ややかな視線を送ることだけだ。
「ふふ、すごい気迫。少しリグレット様に似てるわ。でも所詮ニセモノでしかない貴女が、どこまでその猿真似を続けられるかしら！？」
　ゾーイは真正面からティアの視線を受け止めつつ、胸元からナイフを取り出した。そしてその白銀に煌めく刃で、ティアの衣服を素早く切り裂く。
「うっ！」
　ティアは思わず身を強張らせた。切られたのは、軍服の上着と赤いインナーのみ。首を覆うよう大きめに作られた襟の下端……乳房に沿って膨らみをもつ辺りが、上下に口を開いている。
「この大きな胸、ずいぶんと窮屈そうじゃない。いま楽にさせてあげるわ」
　ゾーイは裂け目をさらに切り裂いてから、ナイフを胸元に仕舞いこんだ。そして充分拡がった裂け目に両手をかけると、力の限りに引き裂きはじめる。
「や、やめて！　何をするのっ！？」
　ティアの批難の声は、ブチブチと服の繊維が断裂する音に掻き消されてしまう。

「ふーっ、ふーっ……ほぅら、丸見え」
　数分後。ゾーイは息を切らせながら、鷲掴みにした服を解放する。見るも無惨に引き千切られた黒いアウターの合間から、零れるような乳房が覗いていた。淡雪のように白く美しい乳房と、初々しい桜色の乳輪。それは美しいがゆえに、女の嫉妬心をよく煽る。
「服の上からでもわざとらしいぐらいに主張してきたけど、生で見るとまた凄いわね。これで一体、何人のオトコを誑かしたの？」
　ゾーイがティアの乳房を掴みながら問うた。一瞬にして形が変わったことから、その力の入り具合も推して知れようというものだ。
「っ……下卑た発想ね。そんな事、してないわ」
　痛みに顔を顰めつつ反論するティア。その貞淑ぶりはさぞ男受けするだろうが、同性からすれば鼻持ちならない。
「ふぅん、本当かしら？　じゃあ果たして青い蕾なのかどうか、確かめてあげる。エヴァ、奏手さまに気分を出させてあげて」
　ゾーイが乳房を解放しつつ命じると、入れ替わりにエヴァの手が白い柔肌を包み込む。そして慣れた手つきで刺激しはじめた。手の平で輪を作りながら乳房を搾り出しつつ、人差し指で先端の突起を転がし、丹念に快感を目覚めさせていく。
「ん、ふぅっ……んっ……！！」
　ティアは思わず鼻から甘い息を漏らした。相当に上手い。単に同性であるというだけでは説明のつかない手馴れぶりだ。おそらくは、いつかリグレットを悦ばせる日のために磨いてきた技なのだろう。それをティアに用いるのは、当てつけか。
「あらぁ、どうしたの？　なんだかちょっと、先が尖ってきてるみたいだけど」
　ゾーイがティアに囁きかける。事実、ティアの胸の蕾は、巧みな指遣いを受けて女の反応を示



しつつあった。男を触れさせた事のない、未熟な果実であるのは本当だ。しかしそれでも、感じるものは感じる。
「……ただの生理現象よ。気持ちよくなんかないわ」
ティアは冷ややかな口調でゾーイの囁きを一蹴した。士官学校時代なら俯いて押し黙っていたところだが、今の彼女には確たる矜持がある。この程度の中傷には動じない。
昔とは違うティアの強情さに、ゾーイ達は顔を見合わせ、目を細める。こうでなくては、と言わんばかりに。
「強情ねえ。だったら……これでも、澄ましていられるかしら！？」
横から見守っていたイヴリーが、急に手を伸ばして尖った乳首を捻りつぶす。
「あうっ！！」
突然の事に、ティアも悲鳴を殺しきれない。しかしイヴリー達が薄ら笑みを浮かべていることに気付くと、すぐに唇を引き結んだ。
「あーら我慢強いこと。そうよね、今じゃ奏手さまなんだもの、こんな程度で泣かないわよね。羨ましいわ。どれだけ根性があれば、たった一年で奏手になれるのか、私達にも教えてちょうだい」
ゾーイがそう言って、近くの傾いたテーブルを転がす。すると、その下から木箱が現れた。中には様々な道具が詰め込まれている。薄く細長い木板、太い紐、そして木槌……。いずれも日常生活で見かける類のものだが、このタイミングで披露されるからには、悪意ある使い方がされるに違いない。
「……！」
ティアの美貌に汗が伝う。ゾーイ達は士官学校時代から、越えてはならない一線を気軽に越える傾向があった。挨拶代わりに手足の筋を痛めるほどの暴行を加えられ、尊厳を踏みにじられた。その狂気を知るからこそ、無関係な人間への被害を恐れてこの場にいるのだが、いざとなればやはり怖い。
「思い出してきたわ……貴女って昔から、いくら構ってあげても黙りこくってる気持ち悪い子だったわよね。そのせいでリグレット様から、『私達がイジめてるんじゃないか』ってあらぬ疑いまで掛けられちゃったのよ？　あれはショックだったわ。リグレット様に嫌われたのかと思って、泣いちゃった」
木箱を引き寄せつつ、ゾーイは何度も瞬きを繰り返す。ストレスを感じている時の癖だ。久しく忘れていたその動作を目にして、ティアにも当時の記憶がまざまざと思い起こされた。
「今の貴女なら、もう少し可愛い反応が見られるかしら？」
ゾーイは今一度ティアを振り仰ぎ、唇を歪に吊り上げる。それはティアがこれまで相対してきた中でも、最も寒気のする笑みだった。

※

「それにしても本当に、凄い胸ね。初めて会った頃は、私達と変わらないぐらいだったのに、いつの間にかこんなに膨らんで……。どうせなら、どこまで大きくなるか験してみましょうか」

ゾーイはそう言って指を鳴らす。するとイヴリー・エヴァの両名は、何も言われずとも床の木箱から同じものを取り出した。薄く細長い木板と、太い紐。それを手に、ティアの両横に並び立つ。

「何をする気なの？」

ティアは鋭く左右を睨む。しかし二人は、その威圧をものともせずに淡々と作業を進めた。曝け出された乳房を上下から木板で挟み込み、その両端に紐を巻きつける。

「ま……待って、そんな事をしたら……！！」

ティアの制止も虚しく、紐は強く結び合わされた。紐が締まるほど、木板は平行に閉じようとし、間にある脂肪の塊を押し潰していく。

「っぁあああぁ゛ーーーーっ！！！！」

さしものティアも、この痛みには叫び声を上げた。顎を浮かせ、白い喉を突き出して。よく通る声質だけに、その悲鳴は痛々しい。

「いい声！　そうよ、そういう反応が楽しいの！！」

イヴリー達は上機嫌で紐を固く結び続ける。乳房の反発が強く、これ以上は無理というところから、さらに3度ばかり、ぐうっ、ぐうっ、ぐうっと引きに引いた。

その結果出来上がるのは、歪なほどに搾り出された二つの球だ。水風船の根元を鷲掴みにしたかのごとく、乳房の頂付近がパンと膨れ上がっている。血が通っていないせいか、乳白色の首や腕と比べても陶器のように白い。

「あはははっ、すーごいすごい！　メロンが潰れちゃってる！！」

ゾーイは口元を覆いながら可笑しそうに笑った。

メロン。その言葉に、ティアの瞳が薄く開かれる。聞き覚えのある揶揄だ。最愛の相手——ルークもかつてティアの乳房をその表現でからかった。無邪気な彼ならば許すことができたが、発言者がゾーイ達となると一転、腸が煮えくり返る。

「わっ、生意気な目。まだまだ構ってほしいみたい」

右の乳房を押し潰すエヴァが、ティアの眼を覗きこんで嘲った。

「くっ……馬鹿な真似は、今すぐやめて！　こんな事をしてる場合じゃないでしょう！？

世界中で色んな人が、預言を失って不安に怯えているの。それを一人でも多く助けるのが、私たち神託の盾騎士団の使命なのよ！！」

ティアは愛杖を握りこみつつ、毅然とした態度で訴える。生真面目な彼女にしてみれば、心の底からの本音だ。しかしそうした綺麗事は、聞く者の心が歪んでいればいるほど聞き入れられない。水と油が、けして混ざることがないように。

「ハイハイ、いい子だねーティアちゃんは。そういえば、昔っからそうだったっけ。

もちろんアタシらだって、信者は助けるよ。実際昨日までだって、ずーっとやってたし。

でもさ、こっちだって人間なんだから、たまにはこういう息抜きも必要なわけ」

イヴリーが鼻で笑いつつティアに告げる。その逆側では、同じく呆れ顔のエヴァが口を開いた。

「“人を助けんとする者こそ、己自身が健やかであれ”……リグレット様にそう教わらなかった？

毎日毎日他人の尻拭くだけじゃ、心が参っちゃう」

その言葉が途切れたタイミングで、ゾーイがイヴリー・エヴァ両名に何かを投げ渡した。女が

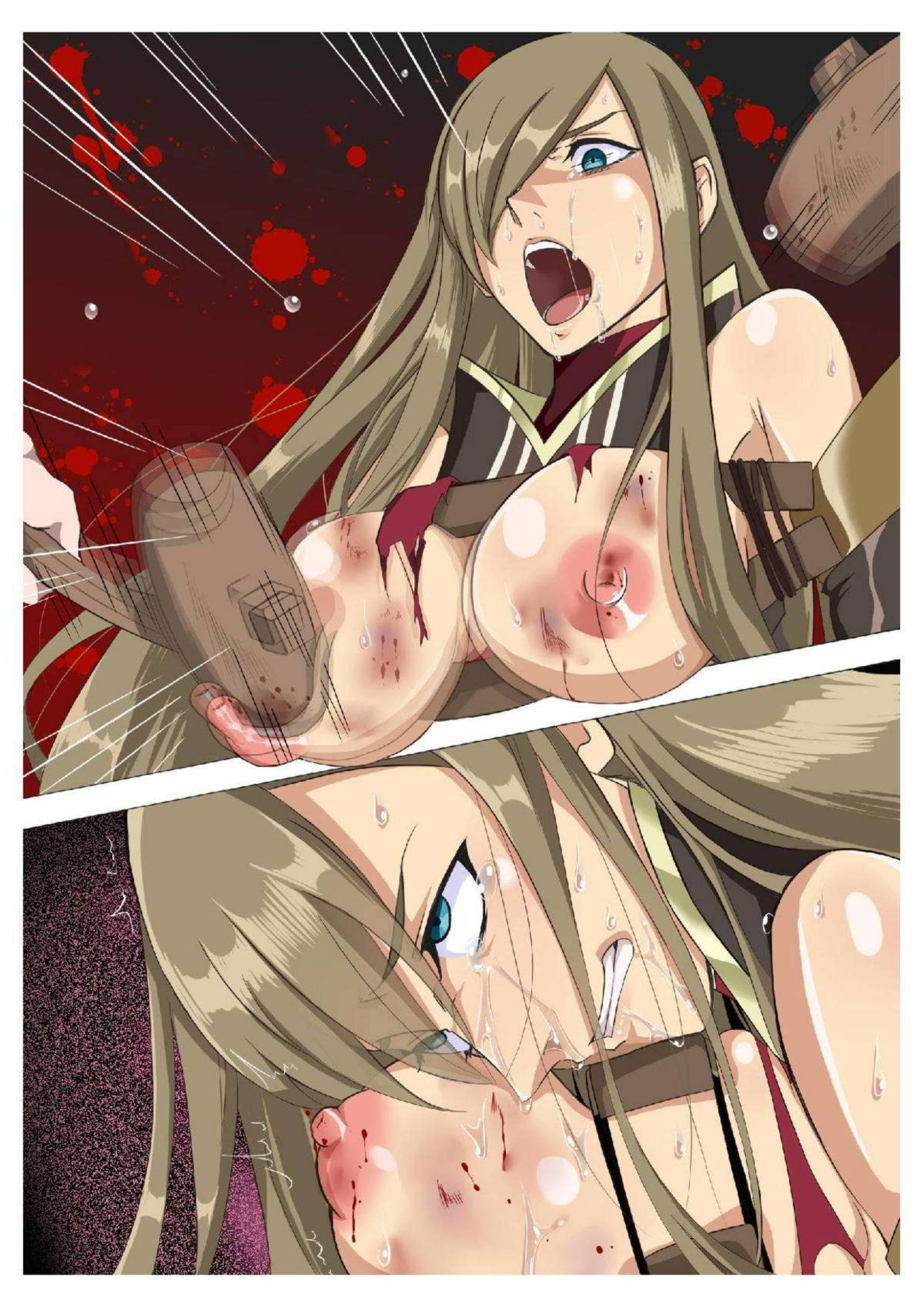
握るのにちょうどいいサイズの木槌だ。ティアの背に、冷たい汗が伝う。
「ってーなわけで、リフレッシュに付き合ってね、奏手さま♪」
　イヴリーが満面の笑みでティアの尻を蹴り飛ばした。乳房の痛みで背後にまで気を回せないティアは、為すすべなく正面の木机に倒れこむ。咄嗟に机の縁を掴んで転倒こそ防いだが、搾り出された両乳房が机に擦れてむず痒い。
「ううっ……！」
　妙な刺激に思わず口を開いたティアは、目を疑った。
　高々と振り上げられた木槌が、今まさに右の乳房へと振り下ろされ――……

　“　ダッ　ゴン　”

　ティアの鼓膜は、はっきりとその音を認識した。木槌が全力で『机に』叩き込まれた鈍い音。その経路にあった乳房は、当然、グミを押し潰したような変形をみせる。
「――――――――――ッ！！！！！」
　悲鳴さえ上がらなかった。金属を指で擦るような音ならば出たが、喉が閉じていて声にならない。代わりに表情がすべてを代弁する。一体化した乳房とハンマーを見下ろしつつ、瞳孔をこれ以上ないほどに収縮させ、脂汗を垂らして。
　そんなティアの様子を知ってか知らずか、今度は左の乳房に木槌が叩き降ろされた。ドゴンッ、と再び重い音が響き渡り、木机が軋む。
「っああ゛あ゛あ゛あぁあぁ――っっっ！！」
　ここでようやくティアの喉が開いた。大口を開けての絶叫。反射的に両手の指が開き、ついにティアは握っていた杖を取り落とす。石の床に叩きつけられた杖頭が、ひどく冷たい音を立てた。

　ドッ、ドゴンッ、ドドッ、ドゴンッ、ド、ド、ドンッ、ドゴン……

　二つの木槌の音が不規則に重なり合いながら、重い音を打ち鳴らす。
「あははっ、すっごい弾力！　どんだけ健康体なんだろ、こんだけやっても全然潰れないよ」
「ほんと、脂肪の塊のくせに生意気ねぇ。こうなったら徹底的にやりましょ！」
　イヴリーとエヴァは、肘から先を使って夢中で木槌を打ち込み続けた。まさに出る杭を叩く所業。豊満な美乳という絶対的なステータスに、嫉妬心がさぞかし煽られたのだろう。
「あ゛、あ゛あっ、ふああ゛あ゛っっ！！！　やめてっ、やめてええぇ――っ！！」
　ティアは、開いた喉をほんの一瞬も休ませることなく絶叫していた。目を見開き、鼻腔を開き、大口を開けて、ダメージを受ける己の双丘をただただ凝視している。普段はクールな美人顔であるがゆえに、愕然としたその表情には格別の求心力があった。
「あっはっはっは、いい顔いい顔！　じゃ、こんな風にされたらどうっ！？」
　右を責めるエヴァが、大きく木槌を振り上げた。そしてぎょっとした顔をみせるティアの眼前



で、柔らかさを増した乳房を見事なまでに潰してみせた。 薄く延ばされた乳房はもはや、木槌の頭へ巻きつくように変形している。
「ぎぃいいぃ゛いぃ゛っ！」
ティアは歯を食い縛って耐えた。すでに顔中が汗みずくだ。濡れた前髪はほぼ完全に右目を覆い、先端に向けて無数の雫が滴っていく。その雫が、また一気に四散した。

ドゴ……ンッ！！

左側のイヴリーまでもが、エヴァに倣って木槌を思いきり振りはじめたのだ。
「……ぐぅううぅ゛っ！？」
連続での重撃に、ティアの喉から悲痛な呻きが漏れる。

そこから、地獄は苛烈さを増した。イヴリーとエヴァは、ノースリーブの軍服から腋を晒すほどに木槌を振り上げては、力の限りに叩きつける。散々小さく叩いて着弾点のコツを掴んだのか、大振りでも的を外すことはない。
そしてこの大振りは、見た目が派手なだけでなく、威力も相応にあるようだった。まるで大砲が乱射されるような音の中、ギキッ、ミシッ、と木机が壊れそうに軋んでいるのだから。
「あ゛ーーーっ、ああ゛ーーっ！！！　うあああぁ゛あ゛っっやべでっ、やめ゛でえっっ！！」
哀れなのはティアだ。先程までも壮絶な表情だったが、今はそれ以上に酷い。怯えきったように瞳孔を収縮させ、開いた鼻腔から明確に鼻水を垂らし、顎が外れるのではないかというほど開いた口からは涎まで垂らしている。
「どうしたのぉティア、優等生の貴女らしくない顔よ？　仮にも年頃の女がそんな表情をするなんて、リグレット様がご存命ならなんと仰るかしら」
木机を挟んで狂乱を見守るゾーイは、ゆったりとした口調でティアを嘲った。音楽的素養の高いティアには、その一言一句がはっきりと聞き取れていることだろう。しかし、反論する余裕などない。

幾度も幾度も乳房が変形し、木槌にへばりついた果てに、ようやく責め役の2人は手を止めた。木槌での責めはする方も体力を使うため、そのうち限界が来る。とはいえ勿論、消耗は責められている側の方が遥かに大きい。
「ぐうっ、うぅう……っふ、ぐう、うう……っふ……」
ティアは、乳房を挟み潰す木板に頬を預けてぐったりとしていた。顔は青ざめ、苦痛のせいか両の眼は白目を剥きかけている。白い歯は閉じあわされて、呻きと震える吐息を吐き出し、視認できるほど濃い鼻水と涎が繋がりながら下方に垂れ下がってもいた。
「はぁ、はぁ……傑作ねぇこの顔。涙やら鼻水やらでグズグズになっちゃって」
「……ふっ、ほんと。こんな顔見せられたら、もっともっと追い込んでみたくなっちゃう！」
呼吸を整えた二人は、今一度木槌を掴み直す。涙に濡れた目でそれを認識したティアは、信じられないという表情を見せた。

「何を、してるの……？　ま、まさか……！！」
「そうっ！　そのまさか、よっ！！」
　そこから、地獄巡りの二周目が始まる。大砲の音と木机の軋み。そして……

「あ　あ　あ゛ーーっ！！　、う　あ　あ゛　あ゛あ゛　あ゛　ーーーーっっ！！」

　歌で人々を魅了していた時とはまるで違う、悲痛な叫び。けれどもなお清純さを感じ取れるそれは、3人の悪魔の嗜虐心をさらに焚きつける。
　幾度となく木槌が振り下ろされ、ティアから悲鳴を搾り出した。やがて彼女は哀れにも腰を震わせ、朱色のタイツの股座部分から下を濃い色に染めてしまう。
「あははっ！！　見て、こいつとうとう漏らしたよ」
「うわぁー、きったなーい！」
　当然それも物笑いの種にされ、ティアに新たな涙を伝わせる。けれども彼女の心には、失禁によって一区切りつき、木槌が動かなくなった事への安堵もあった。
「おーっ、すごい。ほかほかだぁ」
「あはっ、ほんと。それに、最初よりもっとデカくなっちゃったわね」
　イヴリー達はティアの乳房に触れて驚きを示した。叩かれ続けて明らかに大きさを増したそれは、体温とは思えないほどの熱をもっていたからだ。
「はーっ、はーっ……はぁーっ、はぁあーっ、はあーーーっ……」
　ティアは全身を汗と涙、鼻水、そして尿に塗れさせながら、肩で息をしていた。呆然とした表情で、ただただ荒い息を吐く。表情だけでいえば、一周目が終わった時点よりは整って見える。しかし、苦痛は間違いなく上塗りされているのだ。気丈なティアを失禁せしめるほどに。
「上出来よ2人とも。さぁ、次にいきましょう」
　ゾーイとてティアの消耗は承知しているが、だからこそ休ませない。ティアの強情ぶりをよく知っているからだ。

　ゾーイは木箱から青いビンを取り出し、蓋を回し開けた。その途端、周囲に独特の匂いが漂いはじめる。購入したてのオレンジグミの匂いに近いが、もっと尖りがあるようだ。
　そしてその匂いは、ティア達以外にも届いたらしい。ランプの並ぶ集会室の石壁……その向こうから、不規則な音が聴こえはじめる。湿り気のある軟体がのたうつ音。ちょうどローパー種のモンスターが近づきつつある時に、そういう前触れを耳にした覚えがある。
「さっそく反応したようね。一体どこに鼻があるのかしら」
　ゾーイはその音をせせら笑いつつ、ビンを片手にティアの背後へ歩み寄った。ティアの瞳が警戒の色を強める。
「塗るわ。剥いてちょうだい」
　ゾーイが命じると、エヴァはそれだけで意図を理解したらしい。木机に突っ伏すティアの軍服の裾を捲り上げ、タイツと下着をずり下げはじめる。
「い、いやっ！　な、な何してるのっ、やめてっ！！！」

ティアは解りやすいほどに頬を赤らめ、机の縁から手を離して妨害を試みた。しかしその手がイヴリーによって封じられれば、後は内股に足を閉じる程度の抵抗しかできない。

結果、ティアの臀部と膝頭近くまでが、悪意ある3対の視線に晒されることになる。乳房も初々しかったが、こちらも相当だ。艶やかな乳白色の肌には、瑞々しさと弾力が視覚で感じ取れる。まさに剥き卵のような、という形容が相応しく、異性が見ればまず誰もが生唾を飲み込むことだろう。

さしものゾーイ達も、その尻肉を前に表情を強張らせる。見惚れたわけではない。乳房に続いて臀部さえ宝石のような美しさである事実を前に、嫉妬心が振り切れたのだ。

リグレットの生徒としてのみならず、雌としてすら完全なる敗北が揺ぎない。ならばどうするか。手段は数あれど、ゾーイ達が望むやり方は一つだけ。その優れた個を徹底的に貶め、辱め、壊す。ゾーイ達は、互いに言葉にせずとも、沈黙の中でその決意を固め直していた。

「ああ、小便臭い。どうせ漏らすんなら、もうちょっと薄めなのにしてよね」

イヴリーはそう嘲りながら、ティアの尻を平手で打ち据える。初雪のような肌に、薄らと赤い痕がつくほどに。

「っ……！！」

ティアが小さく息を吐きだした。そしてその息が再び吸われた、まさにその瞬間……ゾーイの指が、ティアの秘裂へと割り入れられる。

「きゃああーーっ！！！」

今度はティアも悲鳴を上げた。無理もない。人生で初めて、膣内に異物を迎え入れたのだから。恋人を夢想して自慰に耽る時ですら、せいぜいが乳房と陰核を刺激するのみ。今の今まで 1

――こんな場所で、初めてを奪われる……？

ここに連れ込まれた時点で、殴る蹴るの暴力は覚悟していた。しかし、破瓜など想定していない。女の純潔とは、好き合った相手と充分に仲を深め、添い遂げられると確信してから捧げるもの。それを、こんな悪ふざけで奪うわけがない。獣欲に駆られた男ならいざ知らず、ゾーイ達は仮にも同じ女。操の大切さはよくよく理解しているはずなのだ。

「冗談が過ぎるわ！」

ティアは眼に力を込めてゾーイを睨み据えた。しかし、そこで再び凍りつく。

「……冗談？」

ゾーイの目が、笑っていない。歪んだ口とは対照的に、淡々とティアの眼を覗き込んでいる。

本気だ。ティアはそう確信し、今さらながらに後悔する。

軍人として、ある程度シビアな判断はできるつもりでいた。しかし、いつの間にか甘くなっていた。初めの印象がどれほど悪かろうと、人は変われる。ルークがそうであったように。無意識の内にそう考え、相手の良心を信じてしまっていたのだろう。冷徹に分析すれば、判ったはずなのだ。純潔は大切にすべきもの。だからこそ、嫉妬に狂う悪魔の餌食になると。

「覚悟はいいかしら？」

ゾーイは舐めるようにティアへ囁きかけながら、ティアの膣内へ何かを塗りこめた。ひやりとした感触、独特の刺激臭……手にしたビンの中身を塗りこめているのだろう。

「これ、なんだと思う？　隣にバケモノがいるんだけど、それが大好きな果物のエキスなの。知能は低いから、これの匂いがするところをひたすらほじくろうとするのよ」

恐ろしげな事実を宣告しながらも、ゾーイの指は止まらない。

「い、いやっ！！　離してっ！！」

ティアは必死に逃げ出そうと試みる。しかし、イヴリーとエヴァに肩口を押さえ込まれて動けない。そのせめぎ合いの中、ゾーイの指は一旦膣から引き抜かれ、瓶に浸されてから、今度は肛門に割り入った。

「はぁうっ……！！」

ティアは弾かれたように顔を上げる。肛門への指入れ。またしても彼女の貞操観念を揺さぶる行為だ。

「ふふ、いい締まり。指が食い千切られそう。呑気に歌を歌ってばかりいる癖に、よく鍛えてるわねぇ」

ゾーイは煽りながら、肛門の中を2本指で縦横無尽に掻き回す。

「ほうら聴こえる？　ぐちゅぐちゅ、ぐちゅぐちゅって。貴女のお尻の穴から出てる音よ。そんなに腰ビクビクさせちゃって、気持ちいいの？　それとも、人並みの恥でも感じてるのかしら？　そうよねぇ。奏手ともあろうお方が排泄の穴をほじくり回されるなんて、きっと教団史上初めての事よ。何ていっても、あのリグレット教官でようやく辿り着けるぐらいの地位なんだから」

「し、嫉妬なんて、見苦しい…わ……っ！　……ん、んんぅっ、はあぅっ……！！」

ティアは気丈ながらも恥じらいの反応を見せ、3人の悪魔を楽しませた。

「これぐらいでいいかしら。これ以上触ってたら、あのゲテモノが私の指までしゃぶりに来そう

だわ」
　ゾーイは肛門から指を引き抜き、飴色の川のようなティアの後ろ髪をひと束掬い上げると、丹念に指の汚れを擦りつけていく。
「……っ！！」
　女の命である髪を粗末に扱われ、ティアはいよいよ目尻を吊り上げた。しかし、組み伏せられた者の反抗心など、サディズムを煽るものでしかない。

「さ。代わりに押さえておくから、そろそろアレを出してちょうだい」
　手を拭い終えたゾーイが、イヴリーに代わってティアを押さえ込む。イヴリーは一瞬顔を引き攣らせた。
「うげー、アタシ？　あんまりアレ、見たくないんだけど……」
「大丈夫よ。これだけ匂いをさせてるんだもの。まっすぐここに向かってくるわ」
　そう会話が交わされ、イヴリーが渋々ながら壁際に歩み寄る。本棚脇のレバーを押し下げると、近くの石壁へ垂直に線が走った。その線を境目に、壁は左右へとずれ始め、壁向こうに隔離されたものの正体を露わにする。

　イヴリーが忌み嫌うのも無理はない。その存在は、まさしく異形だった。本体は蜘蛛を思わせる造りだが、頭部はごく小さく、代わりに腹部が異常なほど膨れ上がっている。腹の中身は、胴の下にひしめく触手と連動しているらしい。触手のいずれかが蠢くたびに、膨れた腹に血管のようなものが浮かび上がっている。
　触手の色は赤黒い。太さは、ちょうどティアが作る指の輪ほど。床との接点で折れ曲がってはいるが、部屋の隅まで悠に届くその長さは、十メートルを下る事はないだろう。特徴的なのがその表面だ。何しろ腫瘍を思わせる大小の突起が、触手全体をびっしりと覆っているのだから。
「ひっ……！！！」
　ティアは竦み上がった。幽霊の類も不得手だが、実在する生物の不気味さはその比ではない。
「凄いでしょう。世界中を旅した貴女でも、ここまで気味の悪い魔物は初めてじゃなくて？」
　ゾーイがそう言葉を発した、直後。異形の蟲は、頭を起こして小刻みに動かしはじめる。
「ほら、匂いに気付いたみたいね。エヴァ、私達も程々で逃げるわよ」
「もちろん。あんなのに絡みつかれたら、夢に出ちゃうよ！」
　ゾーイとエヴァの会話の最中、とうとう蟲が動く。一直線にティアの元へと。それを見たゾーイ達は、素早くティアの元から身を離した。
「こっ、こないで！」
　ティアもすぐに机から起き上がろうとする。しかし、間に合わない。異形の蟲は驚くべき速さでティアに覆い被さった。さらには触手で机そのものを抱え込み、駄目押しで逃げ場をなくす徹底振りだ。触手の大半を拘束に用いるところを見ると、ティアの戦闘力をかなり警戒しているらしい。
「いっ、いやあああぁっ！！！」
　ティアは全身を触手に覆われながら悲鳴を上げた。モンスターと対峙した経験は無数にあるが、

絡みつかれる恐怖にまで慣れているわけではない。
「ギチュチュッ……キュチュッ」
暴れるティアをよそに、モンスターは淡々と獲物を弄る。腹部から粘液を分泌しながら。柔な背中が、尻が、内腿が粘液に塗れる中、ついに触手の一本が女の部分に狙いを定めた。
「お……おねがい、やめ……！！」
ティアの必死の哀願も、理性なき魔物には通じない。固めたゼリーのような触手が、閉じ合わされた粘膜を強引に押しひらき、一気に内部へと潜り込む。

「　あぁぁあああ゛あーーーーっっ！！！　」

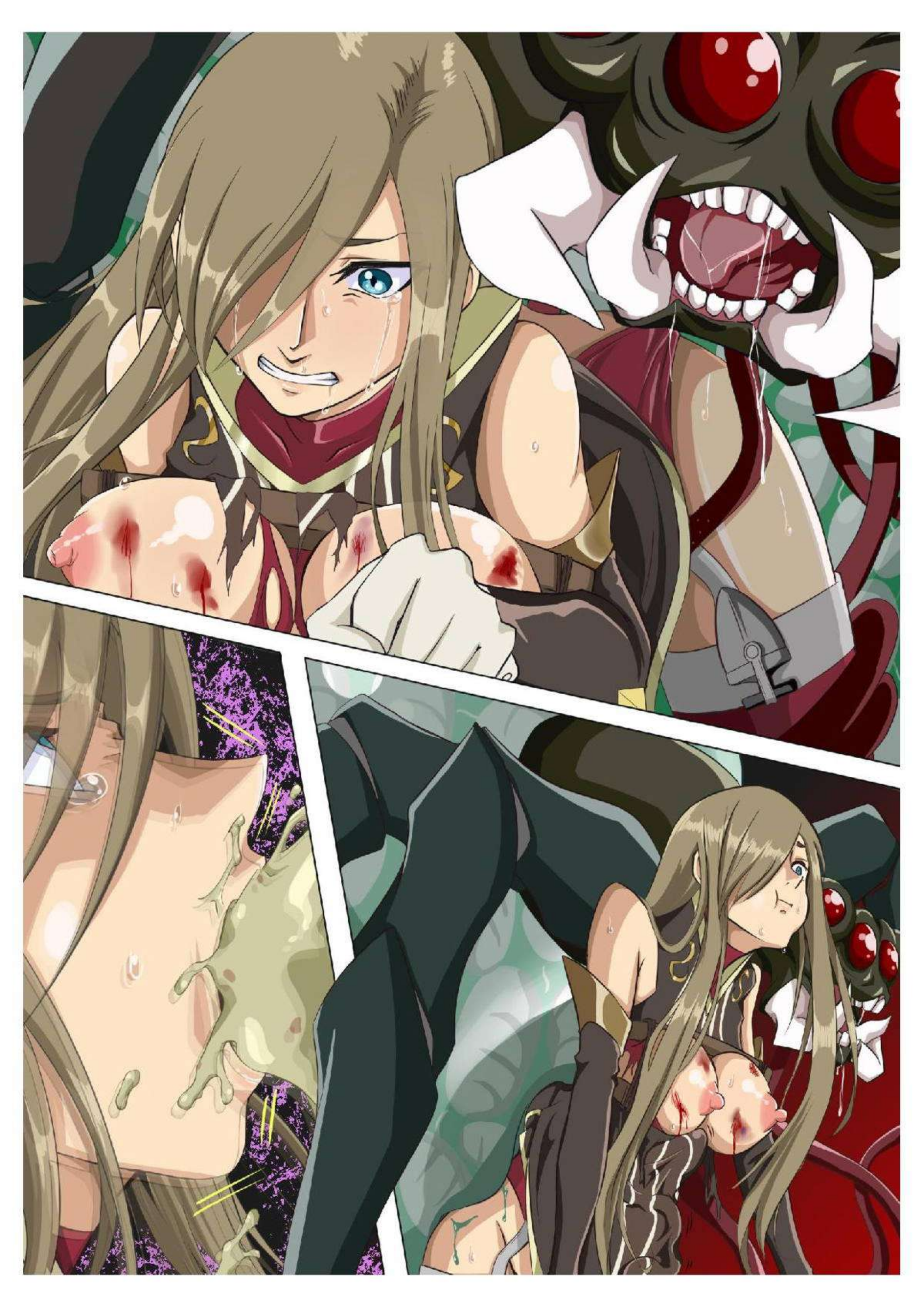
悲痛な悲鳴が響き渡った。どこか幼く思える声が震え、掠れていく。ガラスがひび割れるようなその声は、少女時代が今まさに終わったことを物語るものだ。
（……ごめんなさい、ルーク……　）
ティアは心の中で恋人に謝罪する。無論、処女でなくなったからといってティアを見捨てるようなルークではない。むしろ処女喪失の理由を聞けば憤り、何かできる事はないかと必死に心配してくれることだろう。それでも、操は彼だけに捧げたかった。
「わ、血が出てる！　ね、あのバケモノの触手に垂れてるアレ、血だよね！？」
「血ね。本当に処女だったのねぇ。おめでとう。これで貴女もただの女よ！」
「いやいや、ただのじゃないよ、こんな気味の悪いバケモノに処女あげるなんて」
「そうそう。こいつ自体、もうバケモノの片割れみたいなもんでしょ！」
嫉妬対象を貶めた事がよほど愉快なのか、ゾーイ達が大いに笑う。
「……あぁ……ぁ…っく……はぁっ……！！」
ティアは破瓜の痛みに震えながら、強く歯を食い縛った。
（……許せない……！！）
矮小な嫉妬心などで、他人の小さな夢を踏みにじる……そんな行為が許されていい筈がない。この異形から逃れることは無理だろうが、せめてこれ以上の無様は晒さない。その決意を胸に、ティアは耐える。無数に突起を有する異形の触手で、膣内をはつられても。処女膜の残骸を削られ、最奥を突かれるのが叫びたいほどつらくても。
「……っく、ぅうく……ふう、うぐっぅ……うううう゛……！！」
歯を食い縛って耐え忍んだ。
「んー……。なんかつまんないね。反応薄いし」
「だね。相変わらず根暗で気持ち悪い奴」
イヴリーとエヴァは水を飲みながら、不満を口にする。しかしゾーイだけは首を振った。
「いいえ、ここからよ。ご覧なさい」
ゾーイが指差すのは、ティアの尻肉の合間だ。そこではまさに一本の触手が、未開発の蕾へと侵入を試みている。
「えっ……！？」
肛門への侵入。これには流石にティアも、無反応を貫けない。出すためだけに存在する穴をこ

じ開けて、軟体とはいえ確かな質量を持った物が侵入してくる。そのおぞましさは、恐怖でしかなかった。
「やめて、そこは違……っ！！」
よく通る拒絶の声と、肛門への侵入は同時だった。
「いやあああああっ……！！！」
ティアは絶叫しながら、必死に肛門を締める。しかしそれで侵入を阻めるほど、魔物というものは貧弱ではない。
「キキヂュッ……キイッ……！」
魔物がティアの背で鳴いた。同時に大量の粘液を潤滑油として、触手が腸内を割り開いていく。
「おねがい、やめてっ！！　とっ、止まりなさいっ！！！」
ティアは声を震わせながら背後の魔物に訴えた。しかし、当然言葉は通じない。それどころか、侵入のペースはさらに増したようだ。腰が震えるような異物感が、ゴリゴリと奥を抉り回す。そうして触手が入り込むたびに、無数の突起が未熟な肛門を擦り続けるのだからたまらない。
「うわー、お尻の肉が割れちゃって。ホントに後ろに入ってるんだぁ」
「見えづらいけど、前の方も抜けてないよね。ってことは、破瓜直後に二穴？」
「あはは、すごっ。さすが飛び級で昇進しただけあるよ！」
嘲笑いを遠くに聴きながら、ティアは恐怖していた。
「あああ゛っ！！　もう、それ以上奥に、こな、って……！！」
肛門から入り込んだ触手の侵入が、止まらない。膣側は子宮口に阻まれているが、肛門は直腸から結腸、大腸、小腸、胃……そして口まで、ルートが通じてしまっている。もしもこのまま侵入を許せば、体内を貫通されてしまう。
（何とか……しないと……！！）
ティアは恐怖と苦痛に喘ぎながら考える。説得は通じない。身動きも取れない。となれば術しかないが、それには精神を集中できる状況である事が大前提だ。まさに魔物に襲われている只中で、精神集中など出来ようはずもない。
「あああっ、うああ゛あ゛っ……！！！」
また、事態が悪化した。異物感がとうとう臍近くにまで達したのだ。どうやら結腸や大腸を突破され、小腸に入り込まれているらしい。信じがたいが、意識してみれば確かに、曲がりくねった異物が下腹部で脈動しているのが感じ取れる。
（駄目っ！　ここで、ここで止めないと……！！）
いよいよ瀬戸際と悟り、ティアは固く目を閉じた。
用いるのは『譜術』。大気に漂う特殊な元素を身体に取り込み、譜を唱えることで自然の力を借りる術だ。訓練すれば誰でも、何もない空間に炎を、氷を、雷を顕現させることができる。
しかし、元素を取り込むべく身体の感覚器官を解放すれば、それだけ被虐がありありと感じられた。ゴツゴツと奥までを抉り回される膣。触手が送り込まれるばかりで、全く閉じられなくなった肛門。異物を詰め込まれて水分を染み出させながら蠕動し続ける大腸。そして小腸は……すでに、入口までを触手に満たされている。
「う゛ぐっ！？」

ティアは突如、耐え難い嘔吐感に襲われて息を詰まらせた。
「〜〜〜〜〜っ！！！！」
必死に机の端を掴みながら、顎を上げてこみ上げる酸味を押し止める。もはや術どころではない。嘔吐を堪えるだけで精一杯だ。
「見て、もう限界みたいよ！」
「あっはは、頬っぺたをあんなに膨らませて。どんなモンスターの真似かしら！」
憎らしい嘲笑が聴こえるが、もはや構っている余裕など微塵もない。吐き気を耐えて、耐えて、しかしついに喉元にまで触手が突き上がってきた瞬間に、限界が訪れる。
尋常な嘔吐ではなかった。胃液の酸味だけでなく、獣臭と魚の生臭さ、そして粘液の苦さがない交ぜになり、上向けた唇の端からあふれ出す。
「お゛え、れ゛ぼっ……」
その声と共に、生暖かいものが喉を伝って鎖骨の方へと流れていく。
「あはーっ、やった！」
嘔吐の瞬間をしっかりと見られたらしく、即座にゾーイ達から歓声が上がった。それを脳が認識した直後、ついに触手が舌を押し下げて唇の外へ出る。
「ごぼぉえ゛っ、れ゛ばああら゛っ！！　ぼごっほ……ん゛お゛ぉえ゛げっっ、ぼろあ゛っ……！！」
もはや声にもならないえづきが次々と喉から沸く。澄んだ声、聴いていて心が洗われる声。皆からそう言われる喉から生まれているとは思えないほど、低く濁りきった音だ。
「あっはっはっは、きたない歌！　音律士（クルーナー）失格ね！」
「ねー。ついさっき、人を助けるのが仕事だとか偉そうにお説教されたけど、こんな声の音律士が一体誰を助けられるっていうのよ？」
「ゲロゲロゲロゲロ、ああ汚い！　少しは恥じらいってものがないのかしら」
「あの顔も。女捨ててるよねぇ、完全に」
「ほーんと、ブスねぇ。あれってちゃんと元に戻るの？　ま、戻らなくても全然構わないけど」
詰り。謗り。その最中で、ティアは為すすべなく嘔吐を繰り返す。日常生活ではありえない量の涎や泡を伴って、次々に半固形の吐瀉物が喉を流れていく。

（……私いったい、今、どんな顔を……？　）

顔を嘲る声に不安が募る。なるほど、少し意識を向けただけでも酷い事は解った。両目は焦点を結ばずに虚空を眺め、唯一の気道である鼻腔は激しく開閉し、口は顎が外れそうなほど開いたまま痙攣している。当然、汗や涙、鼻水、涎、そして胃液までもが垂れ流しで、それらの混合液が後ろ髪と首を滴り続けてもいる。
無様だ。もしも近しい人間に見られたら最後、合わせる顔がないほどに。しかし、嘔吐を止めることなど叶わない。触手が蠢くたびに、胃から食道、喉奥にかけてを無数の突起で抉りまわされるのだから。
自分に意識を向けていると、ふと、さらに悪い事に気がついた。吐瀉物には、どうやら腸内の



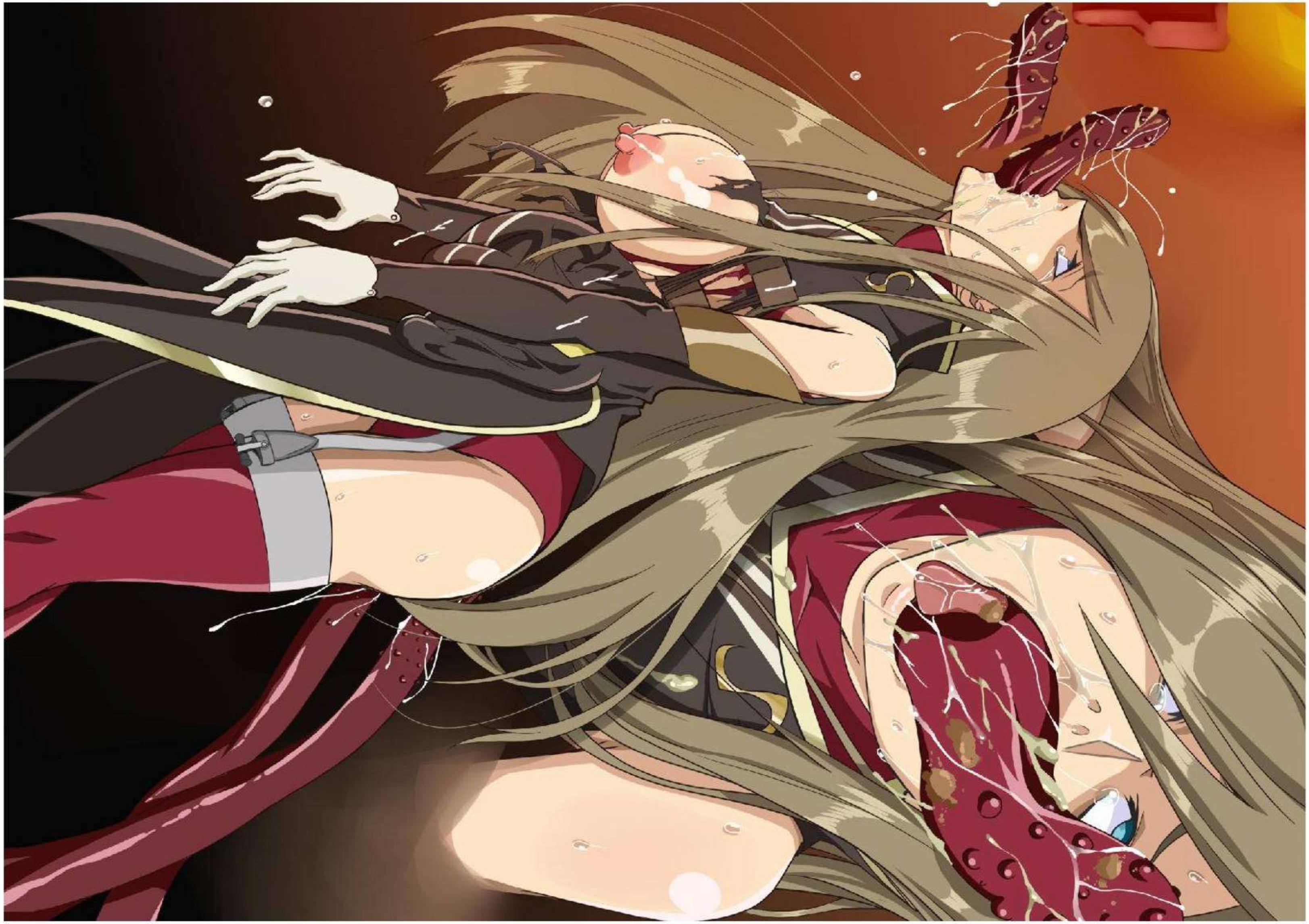
汚物さえ混じっているようだ。直腸から貫かれているのだから当然といえば当然だが、汚物を口にしているというだけで身が震える。
「おおあ゛っ！！ごぼっ、うあ゛、あ゛え゛っ！　ごうぇお゛っ……ほお゛え゛え゛あ゛っ！！」
　触手による刺激とは別に、汚辱感からの嘔吐をうがいのように繰り返してしまう。
　涙で霞む視界では、潜る先を失った触手が戸惑うように宙を旋回していた。凹凸の多い触手の表面には、相当量の汚物がこびりついており、旋回に合わせて周囲へ飛び散っていく。

（　……あんなに、飛び散って……ひどい恥……　）

　もはや恥辱が大きすぎて、どこを恥じるべきなのかさえ判らない。脳が機能しない。
　やがて魔物は、触手で貫いたティアの身体を木机から引き剥がす。垂直になるように。串刺しにした獲物を晒そうとでもいうのだろうか。
「うわー、すごい。腸の形が浮き出てる……。ほんとに全部入ってるんだ……！」
「しかも脈打ってるね。同化してる感じ」
「よりにもよって、あのバケモノと？　ま、お似合いかもしれないわね」
「ねぇ見て。あそこの方はまだ犯され続けてるわよ。よっぽど好みなのかしら」
　嘲笑の中、ティアは手足をだらりを垂らして中空に揺れていた。頼れる仲間の居ない今、もはや逆転の目はない。ただ触手が蠢くたび、反射で嘔吐を繰り返すだけの肉塊だ。

　ぼごぉえ゛……ごえげれ゛ら゛あ……っ……ごぼっ、ぐげごぼろっ……
　め゛ええ゛、え゛ごっ……お゛ぉえ゛げっおろえ゛あ゛……

　自らのえづきと嘲笑だけを耳にしながら、やがてティアは意識を失った。



第二章　一筋の光明

「……確かに、ヤツだな」
「ああ。この澄ましたツラぁ、見間違える訳がねぇ」
　気絶したティアを見下ろし、男達は忌々しげに呟いた。元来の凶相が、負の感情でいよいよ醜く歪んでいる。雑然とした髪型に、安価なレザー装備、垢塗れの浅黒い肌……見るからに素行は悪そうだ。そして事実彼らは、“ならず者”と呼ばれる類の男達だった。背格好も経歴も様々ながら、彼らには共通点が二つ存在する。一つは、非人道的な行為を躊躇わない外道であること。そしてもう一つは、かつてティアに煮え湯を飲まされた経験があること。

　世の中が乱れている時には、決まって悪知恵遣いが暗躍するものだ。オールドラントにおいてもそれは変わらず、『まだ預言を詠んでもらえる場所がある』といった甘言で人々を誘惑し、詐欺や暴行に及ぶ事件が後を絶たない。特に教団関係者が犯行に絡んでいる場合、信憑性の高さゆえに騙される人間も多かった。
　その問題に対し、新元帥カンタビレから密命を受けて対処に当たっているのがティアだ。ティアが選ばれた理由はいくつかある。民からの信頼が厚いティアならば、悪行に関する情報を集めやすい。また、いざ犯行現場に踏み込んで戦闘になっても、数々の修羅場を潜り抜けたティアであれば問題ない。さらには被害者が負傷していた場合、治癒術の使えるティアであれば万全の応急手当が行える。そして何よりも、ティア自身がこうした犯罪の根絶を強く望んでいた。

　――ルークの実現した自由な世界を、穢すような真似は許せない！

　その想いを胸に凶徒を捕らえ続けた結果、ダアトを中心に犯罪の数は激減した。今回のティアの奏手昇進も、こうした功績が評価されてのことだろう。
　しかし、それは“真っ当な”側の理屈。ティアに捕らえられ、社会に居場所を失った人間達は、それを自業自得とは思わない。

　――あのスカしたデカチチさえ邪魔をしなけりゃ、まだまだ甘い汁が吸えたのに。

　盗んだ酒を煽りながらそう考え、機会があれば報復したいと思って過ごしてきた。そうした折に、ゾーイから望みを叶えると誘いが来たのだ。そして半信半疑ながらも指定の場所を訪れれば、確かに見覚えのある顔が、粗末な毛布に横たわっている。軍支給の黒上着を完全に破かれ、赤いインナーも臍が覗くほどに引き裂かれて。
「ボロボロだな。味見済みって訳か」
　一人が耳の穴を穿りながら訊ねた。すると、ゾーイは微笑む。
「ええ。ついさっきまで、夢に出そうな気味の悪いバケモノと愛し合ってたのよ。彼って案外シ

ャイみたいで、アナタ達の気配に気付いて逃げちゃったけれど」
　そのゾーイの後ろでは、イヴリーとエヴァが面倒そうに床を拭いている。床を往復する布は黄ばんでおり、尿や吐瀉物の類さえ飛び散る状況であったことが窺えた。
「へっ、モンスターの後だろうが構やしねぇ。どうせ、愛し合おうってワケじゃねーんだ」
　また別の一人が首を鳴らしながら言うと、他の人間も瞳のギラつきで同意を示す。
「そうね。約束通り、ここにいる20人がかりでこの女を犯してちょうだい」
　ゾーイは横たわるティアを指して宣言した。正式な許可に男達が色めき立つ。ゾーイはその反応を楽しみつつ、条件を付け加える。
「ただし、普通に犯すだけじゃ駄目よ。一人一人がなるべく我慢して、逝きそうになったら次の人間に交替……を、順番に休みなく続けるの。処女喪失したてのオマンコが、完全に擦り切れるまでね。何度も出せそうなら射精してもいいけれど、その場合は必ず外に出すこと。他人のザーメンで汚れたオマンコなんて嫌でしょう？　ルールはそれだけ。さぁ、始めて！」
　ゾーイは屈み込み、ティアの両手首を掴み上げる。すると、ティアが薄く目を開いた。
「う、うん……」
　鼻からやや甘い声を吐きながら目覚めるティア。そして直後、自らの置かれている立場を瞬時に理解する。
「だ、誰なの、貴方達！？」
　獣じみた瞳で自分を見下ろす、下劣な男達。それが何を意味するのかは本能的に理解できる。しかし逃げようにも、両手が頭上で掴まれていては動けない。
「どうせ初物じゃねぇんだ、誰が最初でも構わねぇよな？　俺から行かせてもらうぜ」
　一人の男が、シャツとズボンを脱ぎ捨ててティアに近づいた。
「来ないでっ！！」
　ティアは曲げた足を閉じ合わせる。男は脚を持って開こうとするが、あくまで抵抗しようとするティアのせいで上手くいかない。
「チッ！」
　男は小さく舌打ちし、直後、鋭くティアの頬を張った。乾いた音が響き渡り、ティアの頬にうっすらと赤みが差す。
「……！！」
　慣れない痛みに呆然とするティア。男はその隙を見逃さず、一気に脚を広げさせる。
「あ、いやっ！」
　拒絶するも、もう遅い。男は太腿の間に腰を割り込ませ、手の平に2回唾を吹き掛ける。そしてその手をティアの割れ目に擦りつけると、一気に腰を突き入れた。
「あぐうっっ！！！」
　ティアの目が見開かれる。唾液のみでは到底潤滑が足りず、外陰部が巻き込まれて引き攣るように痛む。膣襞と亀頭との摩擦もかなり強く、ヤスリ掛けでもされているようだ。
　（　――は、入ってる……下衆な男の物が、中に……！！　）
　否定しようもないほど明らかな挿入感に、ティアの顔が青ざめる。モンスターの触手を捻じ込まれた時もショックではあったが、言葉も通じぬ異種族だけに、不幸な事故と割り切りようもあ

った。しかし今は、紛れもなく人間の男の性器が秘裂へ割り入っている。その現実味は、想像以上に深くティアの心を突き刺した。
「へっ。辛そうだな、クソアマ」
　激しく突き込みながら、男が問う。
「くっ……！！」
　ティアは男に冷たい視線を返した。至近での睨み合いだ。気迫は五分。しかし一方が捕食者、一方が獲物である図式は変わらない。
「テメェ、俺の名が判るか？　見事当てたら、潤滑剤にブウサギの脂でも使ってやるぜ」
「ちょっと！」
　勝手な提案にゾーイが難色を示すが、男は眉を下げてそれを制した。判るわけがないと言わんばかりに。そして事実、ティアは男の名など知らない。見覚えはある気もするが、制圧すべき暴漢として対峙したに過ぎないのだから。
「知る訳がないでしょう、あなたみたいな男」
　ティアの冷ややかな返答に、男は獰猛な眼を細める。笑っているのか、憤っているのか。
「だろうな。お前は俺なぞ知らんだろうよ、英雄様。だが俺ァこれでも、教団の一員だったんだぜ。テメェがお楽しみの邪魔をしなけりゃ、今だってそうだったろうさ」
「教団……？」
　ティアの瞳は一瞬驚きを示し、すぐに険しさを取り戻す。
「だったら、余計に許せないわ。あなたに軍人としての誇りはないの！？」
　よく通るティアの声が集会室に響く。穢れのない訴えだ。しかし、それが清廉であるからこそ、場の人間は眉を顰める。
「誇りか、勿論あったぜ。『お前だけに秘密の預言を教えてやる』っつって小洒落た女を犯す時にゃ、特権ってヤツを感じて誇らしかったもんだ。垢抜けた女は大抵彼氏持ちだから、犯してっと『ごめんなさい』だの『預言さえあれば貴方と幸せに……』だのぼやきながら泣きじゃくるんだが、それがまた面白くってよォ。まだまだ犯るはずだったが、テメェのせいで台無しだ。っつーわけで、俺がこの先ハメるはずだった女の分、全部テメェのマンコで償って貰うからよ、覚悟しろや！！」
　男はおぞましい主張を続けながら、激しく腰を打ちつける。
「最低よ、あなた……。困っている人達を助けるべき人間が、わざと他人を不幸にするなんて！」
　ティアは眼前の外道に憤りながらも、その男の性器を受け入れるしかない。
「まだまだ奥が硬ぇな、英雄様。こうして、深く突かれると痛ぇんだろうが！？」
　男はティアの左腿を手で押さえつつ、腰を力強く打ち込んでいく。女の嫌がるやり方をよく知っているようだ。そして事実ティアの顔は、膣の最奥を突かれるたびに引き攣った。今にも泣き出しかねない顔。しかし、実際に涙を流す事はない。

（　泣いても何も変わらない。感情を律することが出来なければ、兵士として失格よ……！　）

　かつてリグレットから教わり、幾度となく自らに言い聞かせた言葉を、改めて思い浮かべる。

そうすれば彼女の目は自然と開き、目の前の凌辱者を力強く睨み据えることができた。
「ケッ、相変わらずイラつく目ェしやがる。いいぜ、そのツラ続けてみろや！！」
　男はティアの右の乳首を捻り上げながら、さらに激しく腰を打ち付ける。無駄なく引き締まったティアの太腿が、なお波打つほどの強引さだ。
「う、う゛う゛……ぐっっ！！！」
　ティアは必死に歯を食い縛り、涙と悲鳴を逃さぬように努めた。

　パンッ、パンッ、パンッという肉のぶつかる音は、5分ほど続いていただろうか。
「ぐう、くっ、クソッ……！！」
　一人目の男は、真横に立つ男へ苦しげに目配せした。すでに上を脱いで待機していたその男がズボンを脱ぎ去った瞬間、一人目は最後に深く突き入れてから腰を引いた。抜き出された男の怒張は、かすかに濡れ光っている。
「あーら。濡れちゃったのティアちゃん？」
　膣の防衛本能による分泌液と知りながら、イヴリーが意地悪く嘲った。しかし性知識の浅いティアは、それを真に受けて目元を強張らせる。
「オイオイ、参るぜ。濡れるってこたぁ、合意も同然だ。レイプになんねーじゃねえかよ」
　二人目の男も便乗して言葉責めを掛けつつ、ティアの脚を抱え上げて挿入した。右足首を肩に乗せ、ほぼ直線になるほど開いた脚の間に挿れる体位だ。
「おっ、こりゃ確かにキツイな。まだまだこなれてねぇっつーかよ。商売柄ガキもずいぶん抱いたが、それといい勝負だぜ」
　男はティアの太腿を腕で抱え込み、引き寄せるようにして腰を遣いはじめた。
「う゛う゛……っ！！」
　ティアが苦しげに呻くのを心地良さそうに眺め、男は口を開く。
「せっかくの怨恨レイプだ、俺も恨みつらみを吐いとくか。俺は街で攫った娘を売り飛ばすのが生業でよ、ケセドニアの裏市場じゃそこそこ名も通ってたんだ。それがテメーのせいで、すっかり信用もパァときた。となりゃ、この身体で償ってもらうっきゃねえよなあ！？」
　開いた脚の間に、斜め上から体重を掛けるような挿入。突き込みは一人目の時以上に深い。

　（　痛い、痛い……っ！　あそこが、裂けそう……！　）

　当然、ティアの眉もより苦しげに顰められる。
　肉を打ち付ける音だけが軽快に響いていた一人目の時とは違い、今度は厚手の毛布を煽るような、ボフッ、ボフッ、という音が混じっている。空気を多分に孕んだその音は、ティアの身体を男が圧し掛かるように犯している事実を、場の全員に意識させた。

　二人目は7分ほど耐え、三人目へ。この男は、歯を食い縛って12分を記録した。
　そして四人目、五人目、六人目……。

「こいつ、スゲー汗掻いてやがる」
土下座させるような後背位でティアを犯す男が、ティアの右太腿部分を撫で下ろす。そして見守る男達の前で開けば、確かにその手の平は一面が濡れ光っていた。
「だな。さっき俺がやった時にゃあもう、股座が汗でヌルヌルだったぜ」
「フン。あの澄まし顔も、犯されりゃ汗を垂らすってか」
「所詮はこの女も畜生ってわけだ。あのでけぇ乳からすっと、さしずめ牛か？」
半裸のまま腕組みをした男達は、悪意を込めてティアを皮肉る。
「ふっ、ふーっ……うう、ぐ、う゛……っ！！」
ティアはまさにその対象である乳房を前後に激しく揺らしながら、歯を食いしばって恥辱に耐える他なかった。

一人平均約7分、強姦開始から実に2時間半の後に、ようやく犯し役が一巡する。しかし、当然ながらそれで終わりではない。延々と目の前のセックスを眺めさせられていた一人目などは、再び腹につきそうなほど怒張を屹立させている。
「オラ、さっさと腰突き出せ雌豚が！！」
男はティアの脚を強引に開かせ、荒々しく犯し始めた。
気合充分な男に対し、不休で犯され続けるティアは疲弊しきっている。なおも相手を睨み据えているのは流石だが、その顔は汗に塗れ、閉じない口からは荒い息が吐かれ続けていた。
「フッ、フウッ……ふん、イキのいい目してんじゃねえか。アソコも前ほどのキツさはねえが、相変わらず生意気に締まりやがるしよ。おかげで、そろそろ逝きそうだ。今度はちゃんと出してやる、そのクールぶった面で受け止めろよっ！！」
男は唸りつつ逸物を抜き出した。同時に白い精が迸り、ティアの顔に勢いよく降り注ぐ。
「うっ……！！」
思わず目を細めるティア。その睫毛と前髪、鼻頭に次々と白濁が絡みついた。
「どけ。次は俺だ！」
射精直後、傍らの男が入れ替わりに挿入を果たした。一人目が解禁した影響か、こちらも射精を意識した腰遣いだ。短く息を吐き、激しく腰を叩きつける。ティアを睨み据えながら。
「んっ、はあ、はっ、はあっ……」
ティアは白濁に半ば遮られた視界で、男の視線を受け止めていた。敵意に満ちた視線。太腿を鷲掴みにする手が、いつ首を締めてきてもおかしくない。そうした敵意をぶつけられ続けると、いかに覚悟を決めたティアでもひどく消耗した。
これで22度目の性交。休まず逸物と擦れ続けた秘裂は、もはや感覚がない。切れているのか、裂けているのかもわからない。内腿を流れる生ぬるいものが、血ではなく膣からの分泌液であることを願うばかりだ。

二人目の男は存分にティアの膣を使い尽くし、最後は胸元へ精を浴びせかけた。そして、その後の男達もやはり射精を続けていく。三人目はまた顔へ。四人目は太腿。五人目は髪。六人目は下腹部。七人目は腋。八人目は背中……。

「う……おえ゛っ、ぷはっ……！！」
身体中を白濁で穢されるうち、ティアの瞳からは次第次第に射抜くような鋭さが失われていく。噎せかえるような汗と精液の匂い。それは、無垢な心を弱らせるのに充分だった。
「処女喪失から数時間で、経験人数二桁かぁ。もう間違っても清純なんて言えないね、お前」
「……っ！」
エヴァが意地悪く囁きかけても、ティアの瞳は力なく横を向くばかり。
ゾーイ達はほくそ笑んだ。ティアはもう牙を失いつつある。この調子で犯し続ければ、気力も体力も尽き果て、惨めに泣き叫びながら許しを乞う姿が見られそうだ。
「ひどい有様。今の貴女って、女として最低よ？」
犯し抜かれるティアに、ゾーイ達はなおも辛辣な言葉を浴びせかける。口内でいずれ溶けるキャンディを、あえて噛み砕くがごとく。そして目論見通り、その言葉はティアの心を深く抉った。

（　……その通りだわ。恥ずかしい格好で犯されて、見ず知らずの男の精を浴びて。
ルーク、ごめんなさい……私、また汚れてしまった……　）

羞恥と恥辱に塗れながら、ティアは心の中で謝罪する。
愛するルーク。彼と初めて会った日の事は、今でも忘れられない。兄の凶行を止めるため、単身ファブレ公爵家の屋敷に乗り込み、そこで顔を合わせたのがすべての始まりだった。思えば無茶をしたものだ。たった一人で、専属の騎士団を有する公爵家を敵に回すなど。あの時も今と同じく、多勢に無勢。その時は、どうしたのだったか———。
（　……そう、そうだわ。あの時は、確か……！　）
そしてティアは、一筋の光明を得る。この窮地から脱しうる逆転の手だ。

「……ん？　おい、こいつ……」
屈曲位でティアを犯していた男が、一瞬腰の動きを緩める。
「あ、あぁ……はぁ、はっ……あぁあ、ア……っ」
その腰の下では、頬を染めたティアがとうとう熱い吐息を吐くようになっていた。耳を澄ませば、男が腰を突き入れるたびに、甘い喘ぎのようなものさえ漏れ聴こえる始末だ。
「ケッ、変態が。こんだけ雑に輪姦されて、喘いでやがる」
「まるで娼婦だな。こんな奴のせいで食い扶持失くしたと思うと、情けなくて涙が出るぜ！」
男達は蔑みの視線をティアに浴びせた。
「こんなシチュエーションで濡らすなんて。とうとう頭がおかしくなったのかしら」
同性であるゾーイ達さえ呆れ顔だ。その中でもティアは、蹂躙に合わせて喘ぎを漏らす。

『……レイ……ズェ……　……クロ……ァ……』

呼吸が乱れているせいか、その喘ぎは聞き慣れない響きを多分に含んでいる。ある者はそれを女が壊れる前兆と断じ、ある者は真似ながら嘲り笑った。共通しているのは、皆がその惨めな喘

ぎに注意を向けているという点だ。
　そう。この時点では、まだ誰も気付いていない。ティアの張り巡らせている網に。

『リュ……ォ……トゥ、エ……ズェ……』

　奇妙な喘ぎはなお止まらない。それを嘲る者のうち、何人かにふと変化が生じはじめた。目のギラつきが鈍り、光を失う。そして直後、彼らは力なく床に崩れ落ちた。気絶……いや、深く眠り込むように。
「お、おい、どうしたんだお前ら！？」
「こ、こいつ、寝てやがる！　あんな興奮してた奴が、何で急……に……」
　もはや止まらない。事態が飲み込めない者、崩れ落ちた人間を訝しがる者。そうした男達も次々と膝をつき、横様に倒れこんでいく。
「な、何、どうなって……！？」
「ダメ、ねむ、い……な、なんなの、これ……っ！」
　床に手をつき、イヴリーとエヴァが呻いた。彼女らもまた睡魔に襲われているようだ。
「やられたわ！　皆、そいつの声……聴いちゃ、だ…めっ……！」
　唯一事態を把握し得たのは、譜術使いのゾーイのみ。ティアの口から漏れる妙な喘ぎが詠唱の一部であると、かろうじて気が付いた。しかし、すでに遅い。場にいる者全てが、知らぬ間にティアの詠唱を耳にしている。或いは嘲りながら、或いは蔑みながら。
　始祖ユリアの残した大譜歌の一つ、『ナイトメア』。この歌を聴いたが最後、どんな人間であろうと、立っている事は不可能だ。

　ゾーイを始めとする全員が床に倒れ伏したのを確認し、ティアはようやく譜歌を止めた。
「はぁーっ、はぁーっ、はぁーー……っ」
　改めて呼吸を整える。喘ぎを装った譜歌が効いたのは良いが、思った以上に消耗は激しい。
「……臭い……」
　ようやく自由になった手で鼻の下を拭いながら、ティアは顔を顰めた。手も胸元も太腿も、体中が精液塗れだ。恐る恐る股座を覗き込むと、こちらも妙に濡れ光っている。ただ、見える範囲に赤い血は存在しない。その事実にティアは、ほっと胸を撫で下ろした。
　屈み込んだまましばらく休憩してから、ティアは立ち上がる。
「ふ……っく、う……！！」
　未だ膣に何かが挟まっているようで、歩こうとすると違和感が強い。しかし一年前の旅では、深手を負ったまま戦闘を継続せねばならない事態はいくらでもあった。だから知っている。たとえ瀕死であろうと、その気になればいくらでも動けるということを。
「返してもらうわ。あなたには過ぎたものよ」
　ティアはゾーイが握る愛杖を取り上げ、足早に集会室を後にする。ナイトメアによる深い眠りはよほどの事では覚めないとはいえ、こんな場所は一刻も早く脱するべきだ。ティアの本能が、強くそう訴えていた。

第三章　叩き込まれる悪意

（　一体、どういう造りなの……！？　）

どことも知れぬ場所を駆けながら、ティアは眉を顰めた。

仄暗い廊下は不気味なほどに変化がない。よく似た形の照明具が、同じような壁模様と、変わり映えのしない緋色のカーペットを照らすばかり。そのような場所を走り続けていると、出口に近づいているのか、元の場所に舞い戻っただけなのか区別がつかない。

しかし、ようやくにして目的地である金縁の扉が見えてきた。ゾーイ達にここへ連れ込まれてから、最初に目にした扉だ。その先には煌びやかなエントランスがある。天井には巨大なシャンデリアが輝き、無数の太い柱が高天井を支え、中央には大階段が広がる空間。外界へ通じる出口は、それらを抜けたすぐ先だ。

（　何とか、逃げ切れたようね……　）

ティアは安堵しつつ扉を開く。かくしてそこには、イメージした通りの世界が広がっていた。所狭しと居並ぶ存在を別にすれば。

神託の盾（オラクル）騎士団の鎧に身を包んだ軍勢。大階段の手摺や巨大な柱に阻まれて全容は把握できないが、数百はいると思われる。そして、ただ頭数が揃っているだけではない。 兵士の一人一人が、稀に見る恵体の持ち主だ。彼らは大階段を囲むように整列し、踊り場で立ち竦むティアを見上げていた。

「これはこれは、奏手殿。どうやら“間に合った”ようですな」

大階段の真下に立つ男が、低く落ち着いた声で踊り場のティアに語りかけた。普通に聞けば、救助隊の第一声として違和感はない。しかし……妙だ。ティアがダアトの街を出てから、まだ半日と経っていない。助けが来るには早すぎる。仮に目的がティアの救出ではなく、あのならず者達の捕縛だとしても、ティアがいる事実に驚かないのは不自然だ。ティアとならず者達の接点は、この建物内で生じたのだから。

一度違和感に気付けば、軍勢の鋭い視線が、その実は脂ぎった獣の眼であることもわかった。今は剥きだしになった胸部に応急処置で白布を巻きつけているのだが、その部分がことさらに凝視されている。

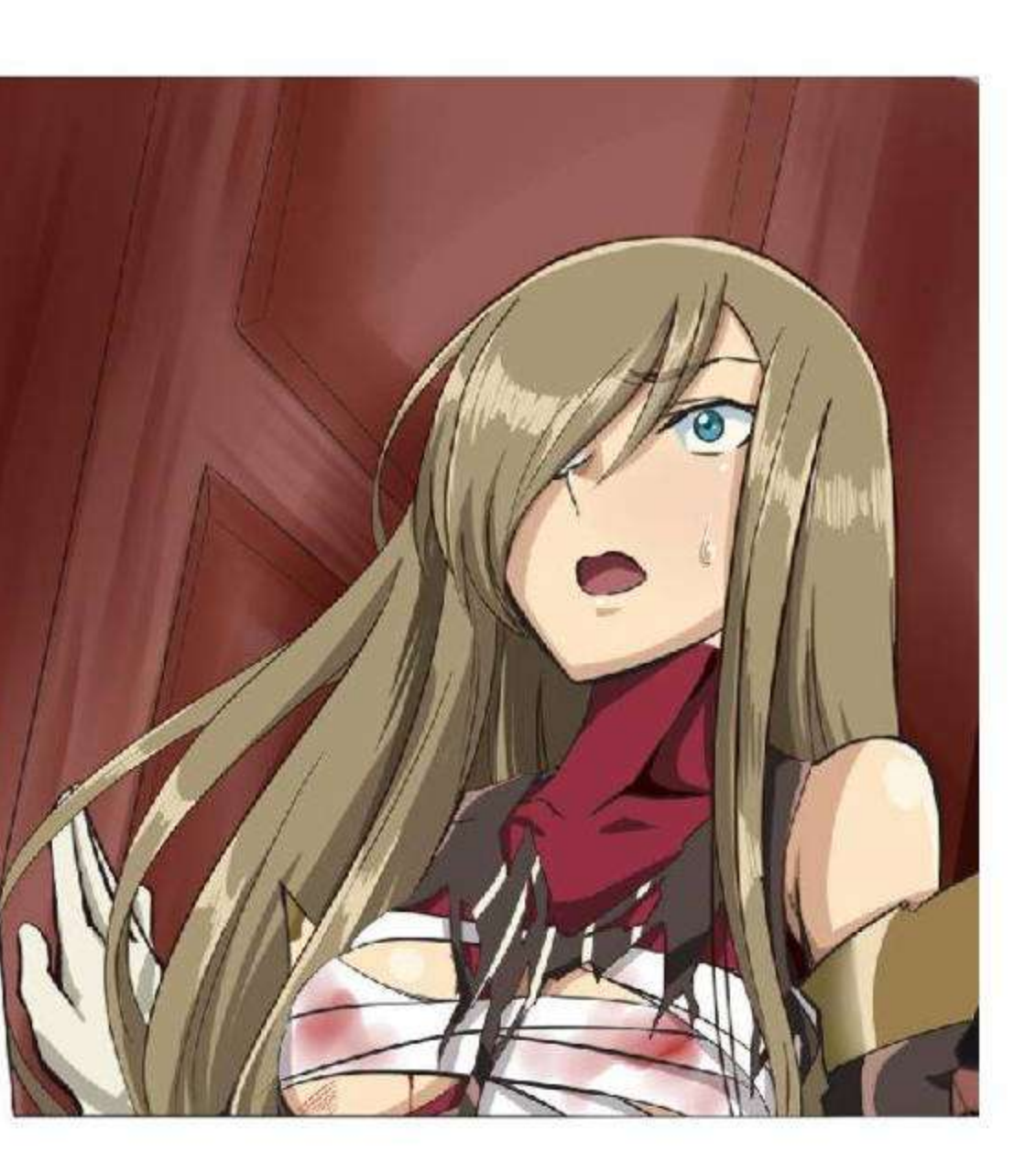
『へへ……やっぱ、でけぇな』

『ああ、たまんねぇぜ。あの服見る限り、例の連中にも悪戯されたらしい』

聞き耳を立てなければ拾えない程度だが、そうした囁きも交わされているようだ。

この集団は、ティアの味方ではない。先の言葉も、“助けるのが”間に合ったのではなく、“逃げ出される前に”間に合ったという意味だろう。

「くっ！！」



ティアは汗を滲ませ、元来た通路に引き返そうとする。正門が駄目なら別の出口という判断だ。しかし、ティアが振り返った時にはもう、金縁の扉は音もなく閉ざされていた。
「ひひひ……」
「くくっ……！」
退路を断たれて立ち尽くすティアの背後から、兵士達の含み笑いが漏れる。

「……あなた達も、私を怨んでいるのね。嫌われ役だった自覚はあるけれど、ここまでとは思わなかったわ」
ティアが呟くと、先程の部隊長らしき男は、口髭を扱きながら肩を竦める。
「ふふ、まさかそんな。あなたを含む英雄の方々のお陰で、世界は崩落の危機から脱したのです。もう戦争で人を殺める必要もありませんし、新総帥は派閥に拘らない素晴らしい方だ。まこと、感謝の念に堪えません」
男は雄弁だった。彼の言葉を裏返したものがそのまま、不満の理由となる。
ティア達が華々しく活躍する陰で、地道に任務をこなす一般兵はさぞや軽んじられたに違いない。その鬱憤を戦争で晴らす機会ももはや無く、カンタビレが軍内の派閥を解体したために、利権の旨味さえ消えた。その結果がこの暴挙なのだろう。
「我々はこれからも、精励恪勤に努める所存です。しかし、それにもモチベーションが必要でしてな。そこでこの機に、我らが目指すべき『高み』を再確認したいのです」
男のその言葉を合図に、数百の兵が各々の得物を晒しはじめる。ある者はロングソードを抜き去り、ある者は長槍の柄で肩を叩き。
「そういう事です。ま、我々じゃ相手にもならんでしょうが、軽ーく揉んでください」
「万が一にもないとは思いますが、無様は晒さんでくださいよ。かの英雄様が雑兵に不覚を取るようじゃ、周りに示しがつきません。その時は、血の気の多い連中がアンタの“再教育”に乗り出すかもしれませんぜ？」
じわりと包囲の輪を狭めながら、男達は緩みきった笑みを浮かべていた。『所詮は小娘一匹、早々に服従させて愉しもう』――そうした考えを隠そうともしていない。
「……わかったわ」
ティアは愛杖・フォニックロッドを構え直し、凛とした瞳で獣達を睨み下ろす。控えめな性格の彼女ではあるが、こうも侮られて黙っていては“奏手”の名折れだ。
「本当の戦いというものを、思い知りなさい！」
その叫びと共に、ティアは胸の前で手を組み合わせた。祈るようなそのシルエットから、後光が差すように光の輪が広がり、周囲を眩く染め上げる。
「ぐっ！？」
「クソッ、目くらましか！」
大階段を駆け上がっていた兵士達が、閃光に怯んで足を止めた。

『天地に散りし白き煌華よ、運命に従い敵を滅せよ―――……』

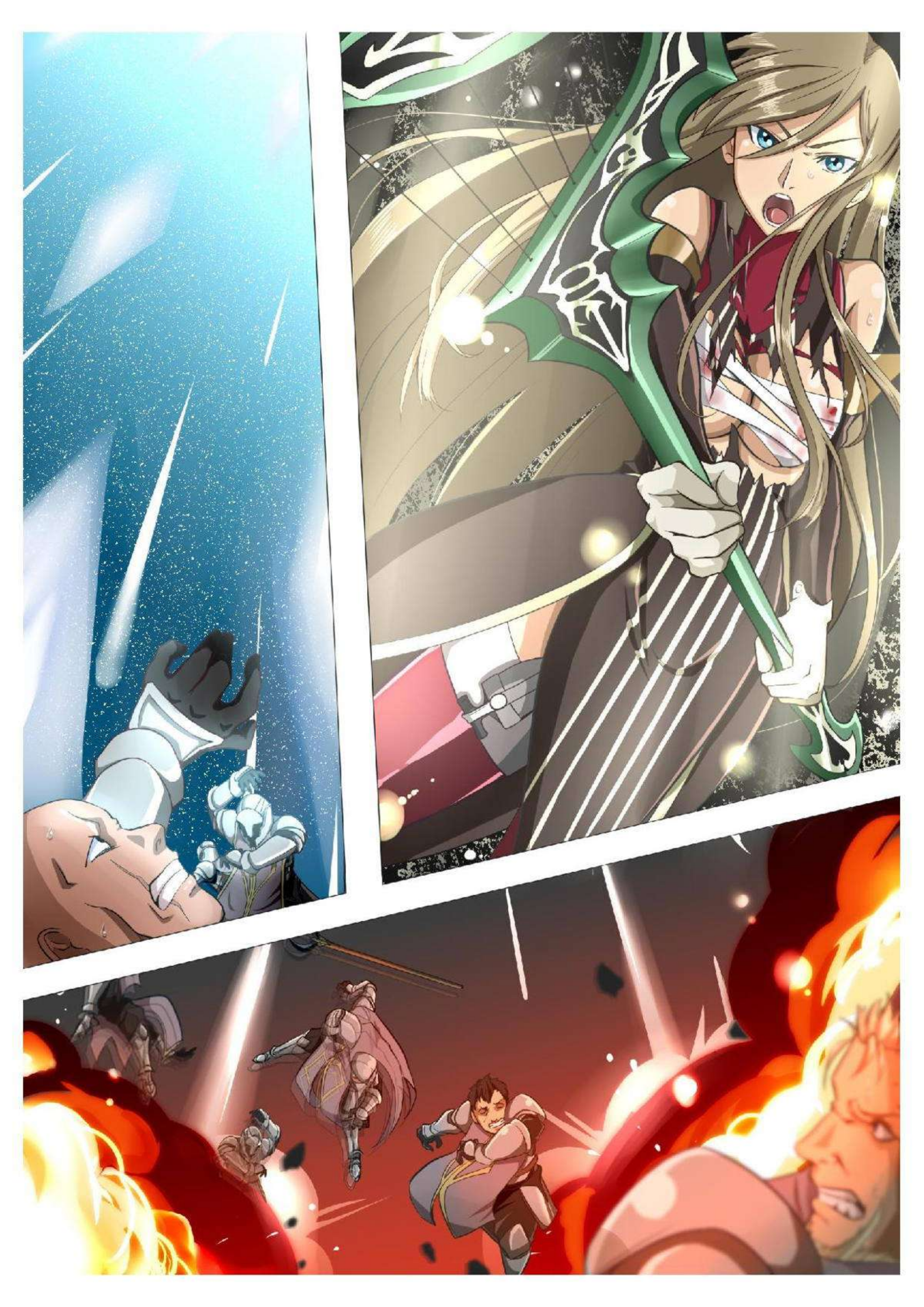
澄んだ声で詠唱が紡がれる。地を這う獣が腕越しに覗き見るのは、純白の女神の威光。
「おいっ！　う、上見ろっ！！！」
一人の叫びで、数百の兵達は天井を仰ぎ、一様に表情を凍りつかせた。高天井を、光る紋様が覆い尽くしている。まるで無数のシャンデリアのごとく。そして何人かは、床にも同じ紋様が広がっている事実に気付いて言葉を失う。
男達はこの時になってやっと、状況のまずさに気がついた。しかし、もう遅い。

『　フォーチューン・アーク　！！　』

ティアの右手が空を切った、直後。天井を覆い尽くす紋様から、輝く洪水が降り注いだ。もはや光の顕現などというレベルではない。人の世に絶望した造物主が、無数の天雷ですべてを無に帰すが如くだ。天井も、柱も、大階段も、床も、自身の手も。あらゆる物の輪郭が消え去り、塵ひとつない白だけが世界を覆う。
痛くもなければ、苦しくもない。衝撃が膨大すぎて、知覚できる域にない。光の洪水に飲まれた人間にできるのは、ただ為す術なく身を貫かれながら、薄まりゆく意識を他人事のように眺める事だけだ。

「……はぁっ、はあ、はあっ……！！」
ようやく光の紋様が消えた頃、立っている者はティア一人だった。もっとも、そのティアとて杖に寄りかかって肩で息をしている。敵の数が数だけに、全員を補足しうる大技を放ったのだが、想像以上に体力を消耗してしまった。そして、問題はその消耗以外にもある。
「……う、うう……」
「な、何が起こった……！？　まだ、生きてるのか、俺は……？」
フロアに倒れ伏す内の何人かが、頭を振りながら起き上がる。彼らはすぐに状況を把握し、近くで気絶している者を揺り起こしていく。
（　そんな……手加減しすぎたの！？　）
ティアは歯噛みした。外道とはいえ教団の仲間であり、命までは奪うまいと加減したのは事実だ。それでも並みの兵士ならば、しばらくは起き上がれない。どうやらこの男達は、想像以上にタフらしい。

首を鳴らして立ち上がった男達は、改めてティアを睨み据える。
「ケッ、ビビらせやがって。派手なだけで効かねぇじゃねえか。まさかこんなんで、俺らを倒せるつもりだったのかよ！？」
「所詮は女の遊びだな。んじゃそろそろ、男の闘いってもんを見せてやるか！！」
女を軽んじる彼らは、ティアの温情ゆえに助かったなどとは夢にも思わず、ゆえに容赦もしない。一人が鎧の重量を感じさせない速さで大階段を駆け上がり、ティアへ槍を突き出した。ティアは半身になって冷静にそれをかわし、杖を振るって相手の鎧を打つ。
『バニシングソロゥ！！』



さらに杖の先で譜力が爆発すれば、たまらず男の巨躯がよろめいた。
「うおおおっ！？」
「ちっ、邪魔だ。どけオラッ！」
体勢を崩す男の背後からまた別の兵士が飛び出すが、ティアは投げナイフを相手の顔に掠めさせてそれを制する。
「ふっ！！」
直後、ティアが跳躍しつつ更にナイフを投げるが、これは男から逸れて階段へ急角度で突き刺さった。
「バーカ、どこ狙って……！？」
そう嘲る男は、床に落ちた3つのナイフが陣を成しているのを見て顔色を変える。
『セヴァードフェイト！！』
ティアの声と共に、三角の陣から衝撃波が吹き上がった。その威力たるや、男達の巨体を軽々と宙に浮かせるほどのものだ。
「おっおお！！？」
「うわあっ！！」
「ばっ、く、来んな……おわあああああ゛っ！！！」
鎧を着込んだ人間が階段上でバランスを崩せば、後続を次々と巻き込みながら転げ落ちていくしかない。

「……なるほど、さすがは主席総長の妹君だ」
大階段の乱戦を見上げながら、部隊長は目を細めた。こちらが屈強な騎士揃いに対し、相手は小娘一人。白兵戦ならばすぐに決着がつくかと思われたが、そうもいかないようだ。踊り場に居座られているのも上手くない。踊り場に行くには大階段を通るしかないが、そうなると数の利は活かしづらい。
とはいえ、長所の裏には短所が潜むもの。相手が奥まった場所にいればこそ、有効な策もある。
「テメェら、いつまでもイノシシみてぇに突っ込んでんじゃねえ！　牽制しもって術で攻めろ！！」
部隊長のその怒号に、ティアの顔つきが変わった。そして、兵士達の顔も。
「ま、そうだな。接近戦で押し切れねぇのは癪だが、こんな狭苦しい場所でやりあう事もねえ」
「長物持ってる奴ァ前に出ろ！　突いて突いて、突きまくってやれ！！」
ティアにとって与し易い近接系の兵が退き、代わりに槍や長杖などのリーチのある武器を持った兵士が前列を固めはじめる。こうなるとティアは苦しい。
「おらおら、どうした！　ボーッとしてっとそのデカチチ、串刺しになっちまうぜ！？」
「くっ、う！」
顔や胴を狙って繰り出される熟練の突きは、横にかわすしかない。そしてその『避けさせられた』先で、的確に敵の譜術が発動する。
今もまさに、右脇腹を狙い澄ました槍を左へかわしたその足元に、茶色い亀裂が走っていた。
「しまっ……！！」

不覚を悟った時にはもう遅い。亀裂から瞬く間に固い岩が隆起し、ティアを突き上げる。
「あう゛っ！！！」
右の膝裏と左太腿に裂傷が刻まれた。しかし最も致命的なのは、右足首が岩同士の間に完全に挟まってしまっていることだ。これではもう足は使えない。
「貰ったぜ！！」
当然、兵士は嬉々として槍を突き出した。ティアは大きく腰を捻ってそれをかわすが、今度はその逆側に同じく槍が突き出される。
「あっ！」
2 本の槍に胴を挟み込まれる形。もう逃げ場はない。ティアの顔から血の気が引く。その足元で、また新たな譜術が発動した。朱色の円陣が広がり、その外周部から中心へ向けて炎の渦が噴き上がる。
「きゃあーっ！　ああ、あつい、っついっ！！　っああ゛あ゛ぁぁあっ！！！」
叫びながら両手をばたつかせるティア。しかしいくら暴れようが、四方の炎からは逃れようがない。その様子はまさに『牢獄（プリズン）』そのものだ。
ティアの服が燃えていく。比較的丈夫な軍服はともかく、インナーや応急措置としての白布は、瞬く間に端から炭化してしまう。その中で焔の檻はいよいよ火勢を増し、その果てにとうとう決壊の時を迎えた。処刑めいた無慈悲な爆発によって。

「きゃああっ！！」
耳を聾する爆発音の直後、ティアの体は天高く放り出され、大階段脇へと転落する。
「あ゛っ、く！！　うう、う゛……ア゛……っ！！！」
漏れたのは悲痛な呻き。階段下へ群がった兵士達が見たものは、右肩を押さえながら歯を食いしばる少女の姿だった。
「へへへ、また高ぇ所から落っこちちまったな。細っこい肩がイカれたか？」
「イイ格好だ。邪魔な布がすっかり焼けちまって、チチが丸出しだぜ」
「生で拝むとまたすげぇな。その綺麗なデカパイなら、確かに世界も平和に出来そうだ！」
嘲り笑う兵士達はすでに、勝ち誇った気になっている。しかし。俯くティアの瞳は、まだ死んでなどいない。
「う、ぐ、えほ……ごほっ」
下半身に裂傷。背中と腕に火傷。右肩に打撲傷。同じく右側頭部から流血。煙のせいで気管も具合が悪い。だが、『それだけ』だ。一年前の戦いでは、この程度の傷はいくらでも負った。そして仲間の誰もが、歯を食い縛ってそれに耐えていた。ルークも、ガイも、ナタリアも、ジェイドも、幼いアニスでさえ。この程度で心が折れていては、彼らに笑われるというものだ。
ティアの左手が強く杖を握りしめる。

「　―――そこまでよ！　」

間近に迫る男達を気合で圧し、ティアは立ち上がった。同時に感覚を研ぎ澄ます。踊り場から

降ってきたのはティアだけではない。そのティアを覆っていた炎もまた、音素となって濃密に漂っている。まさに好機。こうした特定の音素が濃い状況は、時としてありふれた譜術をより高度な物へと昇華させる。
「ハッ、無理すんな。んなボロボロの状態で何が出来るってんだ？」
　兵士の問いに対し、ティアが示した答えは明瞭だった。
「――炎の刻印よ、敵を薙ぎ払え――……」
　彼女の瞳が見据える先に、光の輪が浮かび上がる。兵士達10人あまりを悠に覆う大きさだ。その輪は瞬く間に複雑な印と化し、紅蓮へと色を変えていく。
「うお、おおおおっ！？」
「お、おい。こりゃ、さっきオレが出した……！？」
　鮮やかな紅蓮は、先刻ティアの身を焼いた焔そのもの。それがティア自身の生み出した光と混ざり合い、男達を包み込む。

『フラムルージュッ！！』

　そして、世界は赤一色に染め上げられた。床の印を起点に、螺旋状の焔の渦が絶え間なく噴き上がっていく。エントランスそのものを震わせるその様は、火山の噴火さながらだ。
「うおおおぉおおああ゛っ！！！」
「ぐぎゃあああああアアア゛っっ！！！！！」
　炎の中から悲鳴が響きわたった。恵体に似合わず、ティアの時よりも弱弱しい声だ。

　やがて業火が消えうせた頃には、8人の男達が黒煙を噴き上げながら横たわっているのみだった。手足や口が微かに動いており、絶命はしていない事がわかる。しかし、復帰には相応の時間が必要だろう。
「な……なんだ、これ……！？」
　兵士達は狼狽を隠せない。彼らとて歴戦の猛者だ。いかに英雄扱いされていようが、歌うだけが能の音律士（クルーナー）など相手にもなるまい――そう高を括っていた。しかし彼らは、とうとう目にしたのだ。世界最強の譜術士であるジェイドをして、一流と言わしめるティアの力を。
「さぁ、次は誰がこうなりたいの！？」
　黒煙を上げる男達を杖で指しつつ、一軍を睨み据えるティア。
「ぐうっ……！！」
　兵士達の顔が強張った。ボロを纏った小娘一人に、屈強な男達が気圧されている。しかし、皆がそうであるわけではない。
「だ、騙されるなっ！！　こいつはここに来る前、すでに消耗してたんだぞ？　その上あんな大技を2発も打って、平気なわけねぇだろう！　搾りカスだ、今のコイツは！！」
　一人の兵士が、他の男達に激を飛ばす。踊り場でティアに土の譜術を浴びせた男だ。彼自身も譜術を使う以上、ティアの実力は理解できているに違いない。それでもこう訴えるのは、格上の存在を認めたくないという意地からか。

そしてその強がりは、周りにも伝播する。
「もっともだ。ちったぁ驚かされたが、いい加減タネも尽きたろ！」
「だな。大体術がヤベエってんなら、詠唱させなきゃいい話だ。囲んで一気にやんぞ！！」
互いに鼓舞しあい、男達は気勢を上げはじめた。

（　……まずい流れね　）

ティアは、鋭い視線をそのままに汗を伝わせる。
譜術使いの指摘は正しい。実戦で通用するほどの術技を用いるには、相当な精神力が必要となる。そしてティアは今、その精神力を著しく削られていた。何しろ魔物に純潔を奪われ、ならず者に犯され続けた直後なのだ。本来ならば戦えるコンディションですらない。ましてや精強な騎士数百人との真っ向勝負など無謀の極みだ。となれば、大技での戦意喪失を狙うしかなかった。
もう少しで、騙しきれるはずだった。あと少しで、乗り切れるはずだった。しかし、嘆いても状況は変わらない。この場を切り抜けるには、たとえ望みが薄くとも足掻くしかない。

縦に構えたフォニックロッドで正中線を覆いながら、ティアは素早く状況を把握する。正面には入口に通じるエントランス……当然、敵は多い。向かって左は大階段があるため、襲撃の心配はない。逆に右方と背後は太い柱の並ぶ空間であり、伏兵の脅威があった。
「せァアっ！！」
正面から一人が迫り来る。得物はロングソード、狙いは胴への薙ぎ切り。ティアはそれをロッドの中部で受けつつ、上方へと弾き飛ばす。
「あっ！！」
しかし、ここでティアは相手の膂力を思い知った。剣撃をいなされた相手は勿論、いなしたティアさえ上体のバランスが崩れる。結果として追撃は叶わず、やむなく後ろへ跳んで距離を空ける破目になる。視界の端には、別の一人が剣を振りかぶる姿が見えた。この振り下ろしを直に受けてはもたないが、かといって回避できるスペースもない。ゆえにティアは、自らも杖頭を振り上げて迎撃する。
「く！！」
それでも、敵わない。遠心力を加えたティアの一撃は、火花を散らしながらあっさりと押し切られ、杖頭が床に叩きつけられた。
「今だ、やれッ！！」
男は杖を押さえこんだまま、横の兵士に追撃を譲る。
「しゃあっ、貰ったぜ！！」
男の得物はバトルメイス。彼はそれを嗜虐心に満ちた顔でティアの足へと振り下ろす。しかしメイスが叩いたのは、固い床だけだった。ティアは床へ押し付けられた杖頭を支えに跳び上がり、一撃をかわすと同時に相手の肩口を蹴り込んだのだ。
「うお……おっ！！」
よもや反撃があるとは思いもしなかったのだろう。メイスを手にした男は大きく仰け反り、無

意識に右隣……ティアを制する兵士の腕を掴んだ。
「ぬっ！！」
　その一人もバランスを崩し、ロッドを押さえる力を緩めてしまう。
「はあああっっ！！！」
　ティアは自由になったロッドを握り直し、杖自体に風の音素を付与した。そしてそれを体全体を使って振りながら、敵陣へと切り込んでいく。この振り回しはただの牽制ではない。元より斬撃と相性のいいフォニックロッドに風の力を付与すれば、その切れ味は生半な剣の比ではなくなる。不用意に近づいた兵士達の厚い装甲さえ、チーズのように切断できる。
「があっ！！」
「うあっ！」
　斬られた兵士達が悲鳴を上げる。しかし、今度は彼らも退かない。これは白兵戦なのだ。一兵卒とはいえ、武術に心血を注げてきた自分達が『たかが音律士』に遅れを取るなど、認められようはずもなかった。
　そしてついに戦いは、ティアにとって最も厳しい展開を迎える。兵士一人一人が己を消耗品と割り切り、純然たる人海戦術に移行したのだ。

「うっ、ぐうっ！　くっ！！」
　正面の一人が、猛然とティアに連撃を叩き込む。守りを度外視したその攻撃は苛烈を極め、いかにティアとて防戦一方となる。一撃一撃が重く、受け流し損ねれば腕の骨ごとへし折られかねない。だが正面にばかり気を取られていると、横からの攻撃に対応しきれない。
　ゴリッ、という鈍い音と共に、棍棒の先がティアの右肩へめり込んだ。
「くううっ！！！」
　ティアの涼やかな美貌が歪む。右肩は大階段からの転落時に痛打した泣き所だ。
「へへ、痛ぇだろ？　泣きそうなんだろ？　いいんだぜ泣いても。涙は女の武器ってな！」
　棍棒を手の平に打ちつけながら、兵士が嗤う。ティアはその男を睨みつけた。
「あ、甘く見ないで……！！」
　あくまで気丈な獲物に、男達は口笛を吹いた。そしてまた、数の利に任せて攻勢に出る。
「うう、ぐっ！！」
　ティアは杖で顔を庇うが、その杜撰な守りで防げるのはほんの数撃。残る攻撃はすべてティアの身体を舐め、軍服を、インナーを切り裂いていく。
「きゃあああああっ！！！」
　甲高い悲鳴は、一体何度目になるだろう。

（　彼らがいてくれたなら、こんな相手……！　）

　孤立無援の中、ティアは仲間の大切さを改めて思い知る。かつての旅では、前衛のルークやガイが敵を食い止めてくれた。アニスが敵を撹乱し、ナタリアが援護し、ジェイドが強烈無比な術で殲滅してくれた。それらの助けがあったおかげで、ティアも譜歌という本領を発揮できたのだ。

意味のない事と知りつつも、懐かしまずにはいられない。それほどに状況は絶望的だ。視界の端に見える出口が、遥かに遠い。道を塞ぐ無数の巨漢を、退けられる未来が見えない。

何十度目かの強烈な横薙ぎがティアを襲い、それがついにフォニックロッドを弾き飛ばした。愛杖は激しく回転しながら、遠くの床に転がっていく。
「あっ！！」
ティアの顔が青ざめた。杖は使用者の精神力を増幅させる、術行使の要。その杖の有無で、術の威力は天と地ほども違ってくる。
狼狽するティアは、ごく僅かな間とはいえ棒立ちになってしまう。するとそれを狙っていたように、足首に何かが巻き付いた。
「えっ……？」
鎖だ。後方から投げられた錘つきの鎖が、左足首に絡んでいた。その鎖が強く引かれれば、ティアはあえなく床に引き倒されてしまう。
「うあ！！！」
頬が床に打ちつけられる。しかしその痛みよりも、この状況自体に脳が警鐘を鳴らしていた。起きなければ、逃げなければ。足に鎖が巻き付いている以上、ただ立ち上がろうとしても転ばされるだけだろう。ならば、譜術しかない。杖のない状態では威力は望めないが、不意を突ければそれでいい。
「ははっ。何だこいつ、オッパイのせいでベターッと寝れねぇのかよ！」
「しかし、すげえ弾力だな。横にプクーッと膨れてやがんぜ？」
幸い男達は乳房に注意を向けており、詠唱に気付かない。こういう時ばかりは、男の獣性が有り難かった。
『　……ホーリーランス！！　』
かくして術は成り、鎖を握る男の頭上に、白い光の槍が降り注ぐ。
「うがあっ！！」
低い叫びと共に、鎖から張力が失われた。

（　やったわ！　）

ティアは即座に跳ね起き、兵士達と距離を取る。
「ひひっ、やるねぇ。だがいい加減、無駄な抵抗はよせ。女が丸腰でどうしようってんだ？」
男達はティアを囲みながら、余裕の笑みを見せた。確かに状況は悪い。フォニックロッドの転がった先は遠く、投げナイフもとうに尽きている。しかし、諦める訳にはいかない。
ティアは素早く屈み込み、気絶した兵士の腰鞘からロングソードを抜き去った。
「……ほう」
彫りの深い顔立ちの兵士が、冷ややかにティアを見下ろす。
「お前にそれが使えるのか？　ナイフのような玩具とはワケが違うぞ」
彼はそう言いながら、包囲網から歩み出た。

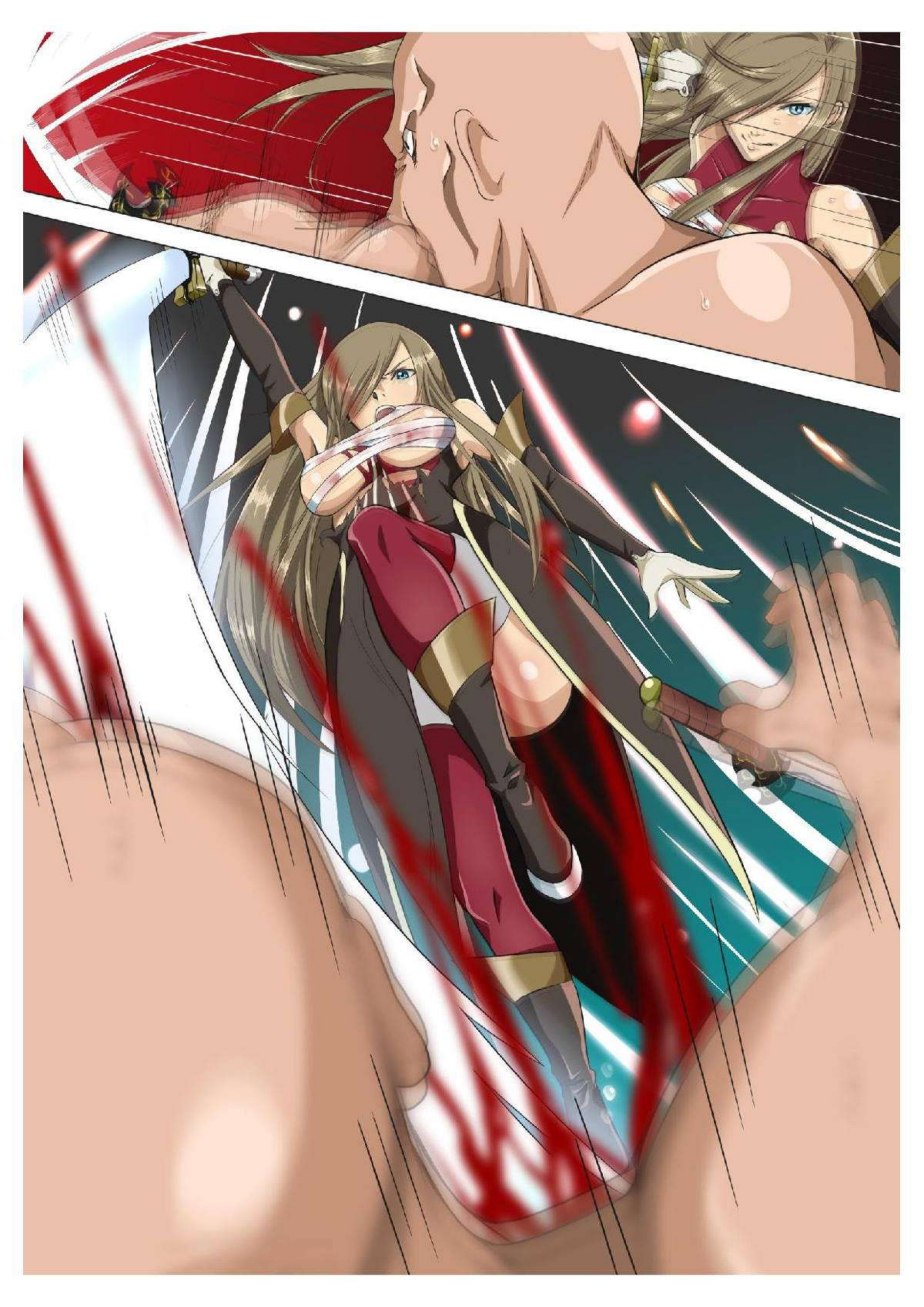
「オイオイお前、目が怖ぇよ」
「嬢ちゃん、今のうちに謝っときな。俺ら相手に剣なんざ使うと、酷ぇことになんぞ？」
　他の兵士達は、囃し立てながら成り行きを見守っている。剣での一騎打ちにおいて、ティアの勝ち目など万に一つもないと信じきっているようだ。
　事実、技量の差は歴然だった。堂に入った構えの男に対し、ティアはかろうじて剣を持ち上げているのみ。それでもティアは、剣に行く末を託す。本身の剣など握るのは初めてだが、それを振るう者の姿は近くで見てきた。何度も、何度も。
「はああッ！」
　ティアは意を決して駆け、気合と共に剣を振り下ろす。しかしその動きはぎこちなく、玄人の顔色を変えるものではない。かくしてティアの一撃は、あえなく兵士に避けられる。
「はっ、バカが！」
　逆に兵士は、いとも容易く剣を振るった。これこそが斬撃だと言わんばかりに。
「っ！」
　ティアの顔が強張る。
　しかし。
　兵士の刃が、ティアの体を捉えることはなかった。
　いや。刃のみならず、兵士自身すらティアの方を向いていない。
　視線の先は、ティアの隣……まるでそこに“何か”を見たように、白刃は空を切る。
　ティアのすぐ傍で、さらりと紅い髪が揺れた気がした。ティアはそれを見て、兵士が追った影の正体を知る。

（　そこに、居てくれたのね……ルーク……！　）

　目に涙を浮かべながら、ティアは剣の柄を握りしめる。まだ終わってはいない。ただの斬り下ろしでは終わらせない。
　彼女の切っ先がなぞるのは、赤髪の少年がもっとも得意とした剣技———

『『　双　牙　斬　！！　』』

　凛とした声が、高らかに謳う。迷いのないその一閃は、兵士の鎧を深々と逆袈裟に切り裂いた。
「な……に……！！？」
　兵士は目を見開きながら倒れ伏す。仲間の勝ちを信じきっていた周囲の男達もまた、その結末には表情を変えた。
「おい……ウソ、だろ……！？」



「ど、どうなったんだ、今！？」
「わ、わかんねぇ！」
男達に混乱が生じている隙に、ティアは出口へと駆ける。
（　今しかない、このチャンスしか……！　）
これ以上の長期戦になれば勝ち目はない。ゆえにティアは、死力を尽くして活路を開く。譜術で敵を怯ませ、襲い来る刃や術で服が破れようとも構わず。しかし、それが仇となる。

カシンッ―――

背後から聴こえた冷たい音に、ティアは振り返る。そして、息を呑んだ。
床に転がるのは、3 カラットのスターサファイアが嵌め込まれたペンダント。ティアにとってそれは、ただの装飾品などではない。
いつも肌身離さず身につけているそれを、ティアは過去に一度だけ手放した事がある。乗り合い馬車の駄賃として、仕方なく。当時まだ我が侭放題の御曹司であったルークは、『これで靴が汚れなくて済む』などと気楽に言い放ったが、ティアの内心は張り裂けそうだった。なにしろ、亡き母の形見なのだ。後に交易拠点でそれが人手に渡ったと知った時には、気丈な彼女でもさすがにショックを隠せなかった。そしてルークは、その事実に気付き、過酷な旅の中で何とか取り戻そうと奔走してくれていたらしい。

『これ、大切なものだったんだろ』

気の遠くなるような大金でペンダントを買い戻し、彼は済まなそうに告げた。ティアは、その場でこそ短く感謝の言葉を述べるのが精一杯だったが、夜にはペンダントを握りしめて止め処なく涙を流した。母の形見が戻ってきた安心感もある。しかしそれと同じぐらい、ルークの気持ちが嬉しくてたまらなかった。世間知らずで自分勝手で、それでも根底には他者への思いやりがある……そう信じた自分に間違いはないとわかったからだ。
この日から、ティアのペンダントは母の形見であると共に、最愛の相手との絆になった。世界を救うべく犠牲となった彼に、もはや触れ合う事は敵わない。それでも彼が必死に取り戻してくれたこのペンダントさえあれば、彼の存在を確かに感じる事ができる。
髪を切られてもいい、肌を傷つけられてもいい。だが、そのペンダントを穢される事だけは我慢ならない。ゆえにここへ連行される道中で、ゾーイ達の隙を見て軍服の内ポケットに隠したのだ。しかし兵士達の攻撃で服が破損した結果、滑り落ちてしまったらしい。
「……っ！！！」
ティアは踵を返し、ペンダントへと駆け寄った。しかし、その肩は無慈悲にも掴まれる。
「逃がすか、このアマッ！！」
頬を殴られ、剣を取り落として倒れこむティア。その細い瞳に大扉が映り込む。外界へ通じる扉だ。外まではあと一歩だったのだ。
「危ねぇ危ねぇ、もうちょっとで逃げられるとこだったぜ。しっかし、馬鹿だなテメェも。こん

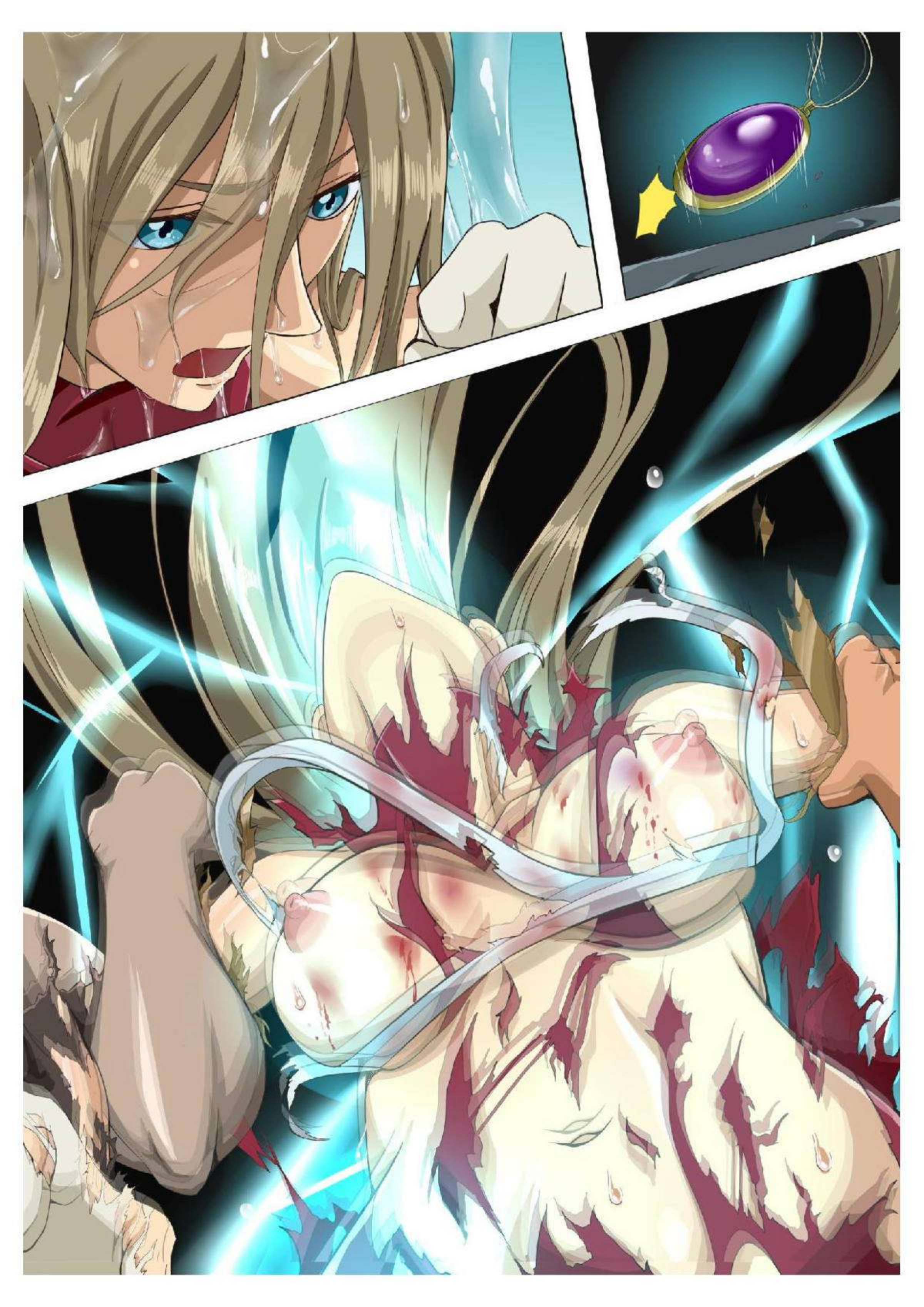
なもんを気にせず走り抜けてりゃ、逃げ遂せたかもしれねぇのによ」
　兵士の一人が、落ちたペンダントを拾い上げる。
「か、返して！！」
　ティアは床に這ったまま叫ぶが、兵士が聞き入れるはずもない。
「バカ言うな。テメェが千載一遇の機会をフイにしてまで取り返そうとする代物だ、当然交渉材料にするぜ。そうだな……返して欲しけりゃ、そこでじっとしてろ。たっぷりと躾けてやっからよ！」
　兵士はそう言いながら、近くの一人に合図を送る。合図を受けた男は頷き、水の譜術『スプレッド』の詠唱を始めた。
「ぐっ……！」
　自身が術の対象になっている事を知りつつも、弱みを握られたティアは動けない。そして彼女は、夥しい量の水に襲われる。樽にして数十杯分はあろうかという激流だ。
「う゛あっ！？　あ、がはっ、ごぼっ！　おごぼぼっ、ぶあ、ぼはあっ！！！」
　水が、顔中の穴に入りこむ。殴られるような痛みと溺れる恐怖が、絶え間なく襲い来る。
「また暴れられちゃ敵わねぇからな。とりあえず、残った体力を搾り切ってもらうぜ？」
　兵士達の低い声が、ひどく遠くに聴こえた。

　やがて溺死が現実味を帯びてきた頃、ようやくにして水流が止まる。
「はあっ、はっ、はああっ……！！！」
　長い髪から水滴を滴らせつつ、ティアは必死に酸素を求めた。その髪を男達が掴み上げる。
「どうだ、水責めは。タフなお前でも堪えるだろ？」
　確かにつらい。しかし、ティアが首を縦に振ることはない。理不尽を強いる相手に服従するなど、彼女の理想とする軍人像からは程遠いからだ。
「まさか。おかげで目が覚めたわ」
　あくまで敵意を秘めたクールな瞳で、冷ややかに獣を見つめる。それは低俗な男の心を、これ以上なく逆撫でする行為だ。
「……ほー、そうかよ。なら、たっぷり飲めや！！」
　男達の声は、憤りのあまりに震えていた。そしてまた、水が降り注ぎはじめる。
「ぐう、うっ！！」
　肩や骨盤が軋むほどの水圧で、這いつくばったまま動けない。
「ははははっ、潰れたカエルみてぇだ！！」
「おまけに、服がまるっと破けちまって……ほぼマッパじゃねえか」
　水の入った耳越しに、男達の声が聴こえる。無様な格好をしているのも、ボロ切れのようだった服がこの水圧で完全に千切れたことも、理解は出来ている。しかし、どうしようもない。
「ほらどうした、飲んでねぇじゃねえか。遠慮すんなよ！！」
　男達はティアの状況をよく理解しつつ、さらに苦しめにかかった。顔を横向けさせたまま、耳を引っ張り、下顎や鼻腔を指で押しひらく。最大限に水が入り込むように。
「あ゛っ、がばっ！！　げほっ、んぉぼっ、ごぼぶふっ！！！」

哀れなティアは、必死に男達の手を押しやろうとしながら、散々に身悶える。

「はぁぁぁーーっ……はぁーーーーっ、はぁあ……っ」
男達が水責めに飽きた頃、ティアの呼吸はひどく弱まっていた。そんなティアの両腋を、2人の男が抱え上げる。助け起こしたわけではない。上体が斜めを向くように固定しただけだ。
「こ、今度は、何をするつもり……？」
胸を上下させながら顎を浮かせたティアは、そのまま凍りついた。
斜め上空わずか2mほどの距離に、尖った紫のエネルギー体が留まっていた。『サンダーブレード』の名が示すとおり、雷撃を幅広い剣の形に凝縮したものだ。生物の体内へ直に電気をエネルギーを通すことで、普通に感電させるより遥かに効率よく損傷せしめる……譜術の第一人者であるジェイドはかつて、この術についてそのように語っていた。そんな代物をもし、水に濡れたこの状態で受けてしまえば……
「なーに、ちょっとしたマッサージみてぇなもんよ。オマエなら平気だろ！？」
術者らしき一人が腕を振り下ろせば、紫刃が中空から滑り落ちる。
「ま、待って！！　いやっ、いやあああっっ！！！」
そして、ティアの痩躯を紫の光が刺し貫いた。ガラスが砕け散るような鋭い破裂音と共に、ティアの身体が跳ねる。
「っきゃああああ゛アアア゛ぁあぁっっ！！！！」
ティアの悲鳴もまた、電気のスパーク音に負けないものだ。
「くはっ、すげえ。オレの腕まで感電してやがる。触ってるだけでこれかよ」
表情筋を痙攣させながら笑うのは、ティアの腋を抱える一人だ。
「見た目もやべえな。脳天から串刺しだ」
「ああ。デカチチがぶるんぶるん揺れてやがんぜ」
男達も下卑た感想を漏らす。その最中、剣の先はとうとうティアの臀部まで達し、そこで二度目のスパークを起こした。見守る男達の肌が紫に染まり、床へ放射状の電撃が幾度も迸る。
「きゃあぁあぁあ゛ァアあア゛ア゛ーーーーーっっ！！！！」
ティアは、喉が裂けかねないほどに絶叫していた。触れ幅の大きいその叫びは、感電という現象の恐ろしさを感じさせる。

紫色の光が、何度ティアの体内から迸ったことだろう。その果てに彼女は、力なく項垂れた。
「ンだよ、あっけねぇ。一発でノビちまいやがって」
電撃を受けたばかりのティアの姿に、男達の視線が集中する。もはやその美しい上半身を覆うものはない。豊かな乳房も、細く絞り込まれた腰も、健康的に引き締まった腹部も。
「おい、ちょっと立たせてくれや」
兵士の一人が、ティアを抱える男達に告げる。ほぼ全壊した鎧に、煤だらけの姿。フラムルージュを受けて気絶させられた内の一人だろう。
「ハメんのか？」
「そりゃ後でたっぷりとな。だが今は……コイツをもっと苦しめてぇ」



辛抱しきれないという様子で、男は指を鳴らす。その行為だけで、場の人間は男の意図する行為を察したらしい。
「なるほど。確かにもう、ただハメるだけじゃ収まりつかねえわ！」
「だろ。さんざっぱら暴れやがったんだ、相応の報いは受けさせねえと……よ！」
男はそう言いながら、ティアの腹部に鋭く拳を叩き込んだ。体格にかなりの差があるため、下から突き上げる不自然な動きとなる。それでもなお肘を直角に保てるブレのなさからは、いかに殴り慣れているのかが伺い知れた。
「う゛ぐっ！？」
腹部に拳がめり込み、俯いていたティアが顎を跳ね上げる。そして痛みに困惑しつつ視線を彷徨わせ、すぐに状況を把握して表情を引き締めた。
「よう。こんな状況でオヤスミたぁ、太ぇ神経してるじゃねぇか。さすがは英雄サマだ」
正面の男が拳を握りつつ煽れば、ティアの目尻はいよいよ鋭さを増す。
「あなた達……こんな事をして、何になるというの！？」
あくまで毅然とした態度で叫ぶティア。大柄な男に囲まれ、無防備なまま殴られるなど、並の女性であれば泣いて許しを乞うに違いない。さすがは軍人というべきか。だがその気丈さも、今は男達の嗜虐心を煽るだけだ。
「何になるってほど大層な話じゃねぇ、単に欲を満たしたいだけよ。このままガンガン腹叩いて、惨めったらしく哀願するテメェの様を拝みてぇんだ。“何でもしますから、お腹を叩くのはもうやめて下さい”ってな」
「あ、甘く見ないで！！」
「吠えるな。だがどうしてもイヤだってんなら、助けが来るまで耐えりゃあいい。来れば、の話だがな！！」
兵士は見せつけるように拳を固め、腰を落として水平にティアの腹部を殴りつける。狙いは臍の付近だ。
「むっ、ぐ……！！」
ティアは目を細め、口を固く閉じて堪えた。まだまだ反応は鈍い。こんな暴力に屈するか、と全身で訴えるかのように。
「ひゅー、細っこいわりに固ぇ腹筋だ。今のでめり込まねぇとはよ」
男は楽しげに言いながら、肩を、手首を回す。そして構えを取り、小さく身体を揺らしはじめた。自分の中にリズムを作り、本格的な攻勢に出るという意思表示だ。ティアは男を強く睨み据えながら、深く素早く息を吸った。
直後、男の靴が床を鳴らす。低い姿勢で放たれる拳の行く先は、下腹部。ティアの白い柔肉に、無骨な男の拳が半ば近く埋没する。
「ぐっ！」
内臓を押し込まれたティアは、息を詰まらせながら床を見つめた。かなりきつい。しかし、耐えられないほどではない。腹筋に力を込めている限り、拳の衝撃が致命的な部位に達することはない。ティアはそう冷静に分析する。そして事実、男が再び見舞った下腹への拳も、ある程度の余裕をもって受け止めることができた。

だが、殴る男とて歴戦の猛者。彼自身もティアの打たれ強さは、一打目の時点で感じ取っている。ゆえに彼は、元より搦め手を用いるつもりでいた。何度も下腹を叩いた行為は布石だ。それによってティアの意識を下腹部に集中させ、満を持して本命の右拳を叩き込む。これまで一度も触れていない急所、『鳩尾』へと。

かくして男の浅黒い拳は、乳房を押しのけながらティアの正中を捉えた。

「……か、はっ……！？」

ティアの額に汗が滲み、瞳が見開かれる。耐える為に固く引き結ばれていた唇もあっさりと解かれ、悪質な咳に近い息を吐き出すばかりだ。

凍りつく一瞬。男の拳が重々しく引き抜かれ、肉感的な乳房が元の位置に戻った直後。悲劇は生々しい現実世界へと溶け出した。

「げほっ、えほ、えぇ゛ほっ！！！　うお゛っ……げほっこはっ……かは…あっ！！！」

ティアは苦痛に顔を歪めつつ、何度も激しく咳き込み続ける。何とも痛々しいが、そうした獲物の弱みを捕食者が見逃す道理もない。男は嗜虐的な笑みを浮かべつつ、気持ちいいほど肩を引いた大振りを叩き込む。よりにもよってその標的は、『胃』そのものだ。

前屈みになりながら咳き込んでいたティアの身体は、男の杭打ちによって直立に戻される。しかしその正常が、見たままに正常であろうはずがない。彼女の胃は、完全に押し潰されているのだから。

ティアの両腕を掴む兵士達は、決壊に至るまでの一部始終を目にした。ティアの鎖骨がくっきりと浮き出し、白い首と顎が震え、頬が膨らみ……そして、盛大に吐瀉物が吹き出る瞬間を。

「んんも゛ろお゛おう゛え゛っっ！！！！」

まずは胃から押し出された液体が、ティアの首から豊かな乳房へと流れ落ちていく。色はほぼ透明に近く、直前に嫌というほど飲まされた水なのだと解る。しかし、それで終わりではない。

「お゛れ゛りゅっ、う゛ぉえっ！！　げおお゛ぉっご……ほぉーう゛ええぇ゛……っっ！！！！」

蛙のような悲鳴で吐き出された吐瀉物の第二波は、弧を描きながら前に飛び、凌辱者達の足元にびちびちと音を立てる。

「おいおい、きったねぇな英雄サマ。無様晒すなっつったろうがよ！？」

男達の煽りも、ティアの耳には届いてなどいないだろう。彼女は大量嘔吐の苦しみに、大粒の涙を溢している最中なのだから。

「おーおー、とうとう効いちまった。悪いなあ、プライドをへし折っちまって」

男は満面の笑みで、充血した鳩尾から拳を引き抜く。

「む゛る、ぐっ……！！」

その過程でまたティアの喉元が震え、とうとう水混じりではない、黄褐色の吐瀉物が口の端から伝い落ちた。

「……はぁ、はぁっ……あ、はぁっ、はぁーーっ……」

ひとしきり嘔吐を終えた後には、さしものティアも唾液を余裕なく垂れ流しながら、荒い呼吸

を繰り返すばかりとなっていた。華奢な身を襲った苦しさを代弁する吐息。けれども、呼吸さえ整えば、ティアは再び視線を上げる。信じがたいほどの眼力を伴って。
「あ、相手の心が折れているか、見極めもできないなんて……神託の盾騎士団も落ちたものね」
紫がかった唇から発されるのは、挑発の言葉だ。ティアを取り囲む兵士達の表情が強張る。
「こいつ、まだ言うかよ？　マジで頭がイカれてやがる……！」
「ああ。どうやら、半端な事をいくらやっても無駄らしいな」
兵士の中でも一際の巨躯を誇る男が、先の一人に代わって歩み出た。かつて騎士団には『黒獅子』の名を冠する巨漢がいたが、彼と比べても遜色はないだろう。
「よお奏手サマ。俺ァ結構、アンタみてぇなのが好きだぜ。強情な女ってやつがよ。いつかこの豪腕で、六神将のリグレットを女らしくさせるのが夢だったんだが……アンタで代用できそうだ」
男は手の平に拳を叩きつけつつ、獲物の反骨心を煽る。そんな彼に、隣の男が杖をかざした。
「おう？　何だ、腕が脈打ってるみてぇな……？」
「ああ、『シャープネス』の効果だ。どうせなら、テメェの馬鹿力を目一杯強化しとこうぜ」
二匹の雄は短い会話の後、黒い笑みを浮かべあう。ティアが最も忌み嫌う表情だ。

（　こんな顔をした連中に、屈する訳にはいかないわ……！！　）

ティアは決意を固め直す。しかし男が力強く床を踏みしめて迫ると、脳内を不安が埋め尽くした。そして、その予感は正しい。岩を思わせる男の拳は、ティアの最大限に固めた腹筋をあっさりと突き破り、一気に手首近くまで埋没する。女のもっとも秘匿すべき器官、子宮を無惨に変形させながら。
「ぃ゛っ！？　……が、あっ、ああがアアああ゛ア゛ぁ゛っ！！」
背中が丸まり、右膝が跳ね上がり。男の腕へ巻き込まれるように、ティアの身体が折れる。大きく開いた口内からは、さきほどの残りらしき吐瀉物が飛沫を上げた。
「へへっ、いい声だ！」
「しかもこの手、何を掴もうとしてやがんだ？　今さらもう、何しても遅いってのによ！」
男達は、ティアの悲鳴を、空を掻き毟るような指を嘲り笑う。
「うるせぇぞ外野共、ちったあ俺にも浸らせろよ」
巨漢もまた拳を引き抜き、赤く陥没した下腹部に満足げな笑みを向けた。そしてそこから、更に気合を入れてティアを壊しにかかる。
まずは左フック。子宮か胃かと身構えるティアの虚を突く、脇腹狙いだ。
「ぐう、うっ……！！？」
脇腹へ拳がめり込んだ瞬間、ティアの顔から脂汗が噴き出した。右目は固く閉じられ、左目が焦点を失う。食いしばった歯の間からは悲鳴が細く漏れる。
「おほっ、強ぇ握り。これが女の力かよ！」
兵士の一人は、空を掴むティアの手指に自らの指を絡ませ、苦悶するティアの握力を堪能していた。事実、ティアの肉体は力みきっている。足は強張りながら忙しなく踏みかえられ、背は苦境から逃げ出そうと暴れる。しかし、男数人に左右の腕を抱え込まれては逃げようがない。恐怖

と苦痛の中、襲い来る分厚い拳をただ眺めているしかない。
「ぐぅうう゛おおえ゛っ！！　がは、ぁ、がああ……っぐ！！」
肺の下に拳がめり込めば、ティアからは苦しげな声が漏れた。眉間に皺が寄り、複雑な表情が数秒続いた後、半開きの口から黄色い吐瀉物が噴き出す。しかし、嘔吐を前にしても男に容赦はない。もはや鎧たりえないティアの腹筋を、次々と拳で貫いていく。
「がぁっ、ぐびゅっ！　んごうっ……げごっ、ぁがはっ……んむごっ、うふおおォう゛っ！！！」
濁った悲鳴がフロアに響き渡る。彼女の澄んだ歌声を知る者ならば、それが同じ喉構造から出る声とは到底思えないことだろう。
声のみならず、体の方も無惨なものだ。拳が腹部を抉るたび、ティアの細い身体はくの字に折れた。豊満な乳房は主の窮状を訴えるように上下に揺れ、右目を覆い隠す前髪が跳ねる。着弾点である腹部などは、もはや至る箇所が赤黒く陥没してしまっている。
「うむ゛っ、ぐ……！！」
一体、何発目になるのだろう。臍近くにきつい一撃を見舞われたティアは、ついに膝から崩れ落ちた。腹部にダメージを喰らった反応として、蹲るのはごく当然だ。むしろ今まで直立していた事こそが驚異的といえる。しかし、殴打に集中したい男はその当然の反応さえ許さない。
「寝てんじゃねぇッ！！」
男は怒りに任せ、固い軍靴の先でティアの股座を蹴り上げた。その瞬間、ティアの青みがかった瞳孔が開き、そして。

「ぎゃあぁぁあああああ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ーーーーーっっ！！」

絶叫がフロアに木霊する。腹を殴られた時とは種類の違う響きだ。あまりに異質な痛みが急に来たために、思わず漏れた声なのだろう。そうした解りやすい悲鳴が出るとは、観衆も、蹴り上げた兵士自身も予期していなかったに違いない。彼らは思わずティアの顔を見やり、目を見張った。あの美しいティアが、口のみならず鼻からも吐瀉物色の提灯を膨らませ、白目を剥いていたからだ。
「はははははっ！　何だよお前、そのヒデェ面は！？」
「おいおい、笑わせんなよ！　あの澄まし顔の原型もねぇじゃねえか！」
そうして笑う最中、さらにティアの状況は酷くなる。内股に閉じた脚の間から、薄黄色い液体が床に滴りはじめる。
「ははっ、見ろ！　こいつ、漏らしてやがる！！」
気高い美女の失禁に、兵士の笑い声はいよいよ大きさを増した。
「ゲロに小便たぁ、汚えこった。こんな汚物が幹部じゃ、いよいよ教団も終わりだな」
元凶である兵士は、言葉とは裏腹に笑みを浮かべていた。そして自失したままのティアの腹部へ、なおも拳を叩き込む。
「う゛えあ゛ぁ……ぁは……っ！！」
ティアの喉からはっきりとした悲鳴が漏れる。しかしそれ以上に変化が起きているのは、彼女の下半身だ。尿に塗れた形のいい脚は、内股に閉じかけたまま痙攣していた。腹部への度重なる

ダメージのせいか、恐怖のせいか、あるいはその両方か。いずれにせよ、ティアが弱っている証には違いない。
「苦しそうだな、英雄サマ。なんでもするから許してください、って一言言やあ終わりだぜ？」
ギャラリーからの嘲りを受け、ティアの表情が強張った。
「馬鹿を、言わな……う゛んっ、ぐうぇお゛ええ゛っ！！」
反論しようとしたところを、また殴られる。不意を突かれたせいか、それまでにない量の吐瀉物が鼻と口から溢れ出した。

肉と内臓の打たれる鈍い音。失禁跡で足裏が暴れる水音。そして悲痛な呻き声。呆れるほどにそれが続き、とうとう並外れた巨漢にも疲労の限界が訪れる。
「あー、殴った殴った。さすがに手が痛ぇぜ」
男は肩を回しつつ、俯くティアの視界から姿を消した。
（　……やっと、解放されるのね……　）
口から吐瀉物や唾液の糸を溢しつつ、ティアは安堵する。腹部の至る所が焼けるように痛い。自分の身体がどうなっているのかという不安は尽きない。けれども、ともかく地獄は……

「おーっし、とうとう俺らの番だな！」

「ああ、待ちくたびれたぜ！！」

男達が発したその声で、ティアの思考は凍りついた。
まさか、そんな。聞き違いである事に望みをかけて、ティアは顔を上げる。
そして、彼女は目にしてしまった。フロアにひしめく何百という兵士達が、ティアを見据えながら嬉々として拳を打ち鳴らす様を。
慈悲など無い。満身創痍の少女一人を、まだ追い詰める気なのだ。
「……え、え……！？」
迫り来る男達を前に、ティアは涙を浮かべながら小さく首を振る。
「いやああっ、やめてえええぇぇぇーーーーーっっっ！！！！！」
悲痛な叫びが空気を震わせた、直後。疲労のない屈強な男の拳が、深々とティアの下腹部を抉った。

そこからは、まさに生き地獄だ。戦闘で屈辱を味あわされた兵達は、仇の華奢な肉体に容赦のない暴行を加え続けた。ある者は壁際に押し付け、ある者は床に引き倒して。狙う場所は腹部が多い。内臓を打った時の苦悶の声は、手足を狙った時以上に兵士の欲望を満たしたからだ。

「どうしたゲロクソ女、いつもの威勢は！？」
男の一人が、腋にティアの頭を抱え込みながら、腹部に膝蹴りを見舞う。
「うう゛む゛っ！！」

ティアは余裕のない表情で床を凝視した。必死に嘔吐を堪えているのは明らかだ。
「なんだ、黙っちまって。こんな攻撃効かねぇって、いつもみてぇに涼しい顔で言ってみろや！」
男はティアの状況を知りつつ、何度も腹へと膝を叩き込む。ティアがたまらず嘔吐するまで。

また別のタイミングでは、兵士2人がかりでティアを左右から打ち据える事もあった。
「そらそら、どうした！　ガラ空きだぜ！？」
「ボケーッとしてっと、ただの的だぞオラッ！！」
一人に腹部を殴られて屈むと、もう一人が背中に肘を落としてくる。その痛みに身を起こせば、脇腹を抉られる。
「あぐっ、があっ！！　げほっ、お゛えっ！！　けぉっあ、がはあっ……！！」
ティアは亀のように頭を抱え、または腹を抱えながら、内股になって震えるしかない。

五月雨のような打撃に耐え切れず倒されても、それで加虐が止むわけではない。倒れたが最後、上から腹を踏みつぶされる事もある。あるいは足首を掴まれて強引に開脚させられ、股座を執拗に蹴り込まれる事もある。
「いだいっ、痛いっ！！　やめてっ、やめでてええーーーっ！！！」
ティアが泣き叫び、失禁しても、兵士が責めに飽きるまでは終わらない。もっとも飽きたところで、また別の者が好みの責めを繰り返すだけのことだ。
傍観しているだけで気が遠くなるような、長い長い時間をかけて。

「———どうだ、いい加減参ってきたろ。もう殴ってほしかねぇよな？　なら、そろそろラクになっちまえ。『なんでもしますから、もう許してください』っつってよ」

もう何度目になるだろう。身体中に痣を作って横たわるティアへ、兵士が囁きかける。しかし彼女は決して靡かない。たとえ犯される結末が変わらないとしても、そこに至るまでの過程は選べるのだ。自らの意思で男達に抱かれはしない。軍人として……女として。
しかしその固い意思が、彼女自身をさらに追い詰めていく。
「ふん、あくまで諦めねぇってか。しゃあねえ……なら、意地でも諦めさせるまでだ」
兵士達は歪んだ笑みを浮かべながら、ティアの髪を掴んで引き起こした。そして太い柱に槍を突き立てると、その柄にティアの手を結びつけて吊るす。
「……な、何を……？」
訝しむティアの耳に、妙な音が聴こえてくる。固い何かが床を擦る音。
恐る恐る視線を巡らせれば、ティアを囲む男達はそれぞれ鈍器を手にしていた。棍棒に、メイス、そしてウッドハンマー。それらの意味するところを察し、ティアの顔から血の気が引く。
「拳骨が響かねぇ馬鹿は、ハンマーでぶっ叩くのが鉄火場の常道よ」
一番手の男は、手に唾を吐きかけながら棍棒を握り直した。握りの部分はごく細いが、先端部分となればティアの腕ほどもある代物だ。
「おーし、んじゃ行くか。“奏手”の意地、見せてくれや！？」

男はそう叫び、力の限りに棍棒を振る。棍棒は風を唸らせながらティアに迫り、腹部の肉を易々と陥没させた。
「んむ゛、ぐびゅ……っ！！」
閉じ合わせたはずのティアの唇から、細く吐瀉物が飛び出す。接触面が拳よりも圧倒的に大きい棍棒は、複数の臓腑を一度に叩き潰す。胃も、肝臓も、小腸も。それによって齎される強烈な嘔吐感は、もはや我慢する暇さえ与えない。
「へッ、一発でゲロ吹きやがった。殴ってる感触は拳のが強ぇが、コッチはコッチで面白ぇな！」
「はっは、テメーの棍棒と同じ形にベッコリ逝ってら。どれ、俺もマーキングすっか！」
赤く痣の走るティアの腹部に、二人目の握るウッドハンマーが打ち込まれる。
「あ゛っ…！」
被弾箇所は、臍のやや上。嘔吐はなく、漏れた悲鳴もごくか細い。しかしそれは、ダメージが少ないゆえではない。むしろ事態が深刻すぎるからこそ、吐くことも叫ぶことも出来ないのだろう。恐怖に目尻を引き攣らせる瞳と、病的なまでに滲み出た脂汗がその証左だ。
「くく、すげー。アブラ汗ダラッダラだぜこいつ」
「いいねー。まだ二発だぜ？　こっからどうなっちまうのかねぇ、英雄サマよぉ！！」
ティアの窮状が、兵士達の闘争本能を焚きつけたのか。ここから、入れ替わり立ち替わりの滅多打ちが始まった。

「ぉげお゛お゛ぉっ！！　げおっ、ごえ゛ぇっ！　んも゛ぇっ、ぐぶ…むっ、げおお゛お゛ぉえ゛っっ！！」

胃や子宮を叩き潰され、繰り返し嘔吐する。失神しても、腹を叩いて強引に覚醒させられながら。
その中でティアは泣き叫び、暴れ、蛙のような濁った悲鳴を上げ続けた。

一体何時間、そうした状況が続いたのだろう。終わりがないようにすら思える阿鼻叫喚の中、甚振る兵士達は次第にヒートアップしていく。
「うっしゃあ、今度はコイツで行くぜッ！！」
そう言いながらティアに近づくのは、拳で散々にティアを苦しめた、黒獅子並みの巨漢だ。人の頭蓋を丸ごと握り潰せそうなその手が握るのは、巨大な鉄槌。それまで兵士達が手にしたどれよりも大きく、どれよりも明白な硬さを訴える、禍々しすぎる凶器だ。
「うっは、またえぐいモン持ち出してきたな！？」
「がははははっ、んだよありゃ？　太さがもう破城鎚並みじゃねぇか！」
兵士達も呆れたように武器を下ろす。これがトドメとなる事を察し、見物に回るつもりらしい。
笑いの絶えない中、一人だけ空気が違うのは、これから凶器を叩き込まれる少女だ。
「……え……う、嘘……でしょう……？」
言葉を失い、青ざめるティア。しかし、槍に両手を結わえ付けられた彼女に逃げる術などない。ただ恐怖に震えながら、一歩また一歩と近づく暴虐者を見上げるばかりだ。

男の巨躯がついに、ティアの全身を影で覆う。
「や、やめっ……」
静止の言葉を口にするティアの前で、男は鎚を構えたまま、たっぷりと腰を捻った。まさしく、巨大な城門でも打ち破ろうかというように。そして、逆光の中、男の眼が笑う。
「やめてえええええぇーーっっ！！」
恐怖に耐え切れずティアが叫んだ、まさにその瞬間。男は満面の笑みで腰を切った。鉄槌は獣が吼えるような音を立てて空を裂き、ティアの細い胴体に直撃する。
ぶちゅるっ……
汗に濡れた肉が叩き潰された音——それが、場の全員の耳に飛び込む。そして。

「む゛お゛お゛え゛え゛え゛ええ゛゛え゛ええ゛ぇ゛え゛っっ……！！！」

凄まじい——そう形容するしかない声が、ティアの白い喉から迸る。およそ普通の女の生涯で、そのような声が出る機会はないだろう。事故で骨を折った瞬間でも、双子を出産する時ですら。それほどの声が、涼やかな美貌で知られるティアから発せられているのだ。
もはやティアに余裕など一かけらもなかった。吐くものもない状態でなお嘔吐の兆しを見せ、直立を保とうと両脚をこれ以上ないほどに筋張らせる。吊られた状態ではむしろ衝撃を受け流す方が得策なのだが、そこに考え至ることさえできていない。
「おおおおお……らああァッ！！！！」
男は至福の笑みと共に、総身の筋肉を盛り上げ、ティアの腹筋へとより深く鉄槌を食い込ませていく。結果、ティアの手首を結わえつけた槍は激しく軋み、ついには音を立ててへし折れる。
手の拘束が解けたティアの体は、数メートルほども飛び、何度も転がり、床に額を擦りつけながらようやくにして静止した。

「あ゛……っひ……ごぼろお゛っ……げ」

無惨に広がる髪の下からは、なおもえづくような声が漏れている。無様なその姿を、兵士達は散々に嘲笑った。
「ちと強烈すぎたんじゃねぇか？　見ろよ大将、土下座されちまってんぜ」
ギャラリーの一人がティアに近づき、セピア色の髪を根元から掴みあげて顔を晒させる。

ティアは、完全に気を失っていた。
苦悶のままに白目を剥き、舌を突き出した顔。
涙や鼻水、吐瀉物、脂汗、尿……そうした体液に塗れ、腹部に無数の痣を残す身体。
痛々しいその姿を前に、しかし凶行に及んだ当人達はむしろ誇らしげだ。
「ははははっ、見ろよあの面ァ！！　最高にブサイクだぜ？」
「ああ。やれ美人だの女神様だのと崇められときながら、ちっと苦しいとこれだ。ダアトの信者共が知ったら、さぞや幻滅するだろうな」

「おまけに頭も悪ィしよ。一言哀願すりゃ勘弁してやるっつってんのに、結局こんなになるまで痩せ我慢しやがって。バカすぎんぜ」

嘲り笑う兵士達に、ティアへの敬意など微塵もない。疲弊した状態で、数百人を相手に勇ましく戦い抜き、最後まで誇りを手放さなかった気高き女性……そう評価をする者は誰一人いない。

「よーく肝に銘じとけよ、テメェら。いくら鍛えようが、“個”の力なんざこんなモンだ」

師団長もまたティアを見やり、小馬鹿にしたように眉を潜めた。

「それすら知らん英雄殿には、強者たる我ら雑兵の力を注いでやるとしよう……たっぷりとな」

師団長と兵士達は、一様に口元を緩ませる。

もはや哀れな肉塊と成り果てたティアの肢体を、無遠慮に視姦しながら。

（後編に続く）

あとがき

◆炙りサーモン/マヨ　（イラスト）

初めまして、イラスト担当の炙りサーモン/マヨと申します。この度は本作をお買い上げいただき誠に有難う御座います。
今更何故テイルズ、しかもティア・グランツを題材に！？と思われる方もいらっしゃる方もおられると思います。もう 10 年以上前の作品ですし、テイルズも現状やや影が薄くなっておりますから…。
しかし自分にとっては学生時代に大好きだったこの作品、そのヒロインで同人作品を作るということは長年の悲願でありました！
このキャラのどこにそんな魅力を感じたのか？　個人的な解釈ですが、最初は単に「軍人たらん」として気丈に振舞っていた彼女ですが、後半は「主人公のために、主人公の憧れる自分であらねば」という意識から殊更気丈に振舞っているように見えました。
そういう彼女の強さと脆さが同居している所に惹かれたのだと思います（全く見当違いの解釈かもしれませんが）。
この作品を通して、私の考えるティアの魅力が少しでも伝われば幸いです。後編ではティアが更なる暴虐にさらされることになりますので、ご期待ください！
最後に、私の我儘に付き合って頂き私の考えるティア像を表現するために尽力してくださった燻製ねこ様と、お買い上げくださった皆様方に感謝を申し上げて結びの言葉とさせて頂きます。
改めて、今回は本当に有難うございました！！

◆燻製ねこ　（シナリオ）

初めまして、もしくはお久しぶりです。シナリオ担当の燻製ねこです。お買い上げ、誠に有難うございます。
今回はナムコの古き名作、TALES OF THE ABYSS の二次創作です。
アビスは私自身もその昔ものすごくハマっており、数ある RPG の中でも思い入れの強い作品です。
執筆にあたって作品を振り返る中で、癖の強いキャラクターに特異な世界観、そしてテーマ性の強い重厚なストーリーに改めて引き込まれました。
アイディアを練っている間も、実際に自分なりのアビス世界を描写している間も、大変楽しく作業ができました（特に戦闘シーンには、私なりのアビス愛をたっぷりと込めています！）。
上で炙りサーモンさんも触れておられる通り、後半は更なる暴虐、ならず者・兵士数百人による終わりのない輪姦地獄が待っております。発売された折には、ぜひとも宜しくお願い致します。
そして炙りサーモンさん、予想を遥か超えたボリュームの美麗な CG 集、ありがとうございました。お買い上げ下さった皆様にも、改めて感謝を言葉を述べさせていただきます。
有難うございました！！